

## ヴェーユと実存主義者たち③

村上吉男

これは前号に続く拙論である。<sup>(1)</sup>

この拙論中に掲げた、サルトルの諸引用文は、そのいかなる思想（観念）も筆者にまるで手を換え品を換えるごとき表現にみえる点で、同様の諸引用文をして羅列せしめた感を否めなくさせるが、それでも彼にいう〈存在論〉がすなわち「認識論（観念論）」であるとの、筆者の主張を証すにあっては少なからず適当すると判断し得るからして、諸引用文よりその証明に関し浮かび上がるであろう、いくつかの問題を取り上げ、それらに筆者なりの答えをみつけては以下にまとめおくことが課せられてくる。

何よりもまず問われねばならぬは、たとえば筆者に、〈真理〉とされる、そのあらゆるものに対してつねに〈知的誠実さ〉をもって接するヴェーユに比べ、サルトルがかの〈人間存在〉を〈真理〉の一に断じるかはともかくも、かの〈人間存在〉すなわち本来的な〈存在〉をめがける際に、あのように奇をてらったとしかみえない、数知れぬ思想でもって、『存在と無』をものする哲学に、要は〈存在論〉を優先せしめた哲学に、果たしてその基にし得る思想（観念）があるか否かを探らせ確認させることにある。思うに、かかる思想（観念）はある、それは〈自由〉という思想（観念）である。しかもこれをヨハネによる福音書を例にした〈初めに言（ことば）があった〉<sup>(2)</sup>に倣わせていえば、「初めに自由（なる観念）があった」となろう。つまり〈自由〉はかの〈人間存在〉にとって、筆者が適宜取り出した、彼の諸引用文において、彼に主張されよう〈選択〉〈行動〉〈投企（参加）〉〈不安（嘔吐）〉〈対自（実存）〉〈即自〉〈無化〉や〈無〉などの各思想（観念）よりも先きにくる、それこそこうした諸思想（観念）に〈先き立つ〉ということである。

だが何ゆえ〈自由〉と「確認」できるか、換言するとなぜ〈自由〉がこれ以外の、前記した諸思想（観念）に〈先き立つ〉思想（観念）になると捉え得るかである。それにはすでに掲げおいた諸引用文の一の、〈即自存在の全体としての世界（le monde comme totalité d'être-en-soi）〉と述べられた語句が参照される。筆者は〈即自存在の全体〉とした〈全体（totalité）〉の語に括弧を付して「自らと事物や他者」と書き入れた。「自ら」が〈わたし〉を、「事物や他者」が〈わたし〉を除く、外的〈世界〉をさすは当然である。その〈わたし〉とはまた、サルトルに〈わたしの世界〉とされたのだから、外的世界に対するに内的世界とでもいい得るならば、彼が内的世界なる〈意識〉に去来する問題を、例の『嘔吐』（1938年）や『存在と無』（1943年）などの各主題としてあらわさざるを得なくさせたであろう、この数年間の時期は、彼の〈意識〉を外的世界にかかわらせずに、要は当時（時代）の動向を自らに受け止めさせずに、彼のめざす〈人間存在〉に到達せしめなかったにちがいのかるうと読むことができる（彼が時代の状況と無関係に諸思想（観念）を成り立たせるといい放つのであれば、その哲学はもはや「実在論」に立つのではなく、端から「観念論」にしかならないといえよう）。周知の通り、ドイツ全体主義の確立（1933年）、第二次大戦

の勃発（1939年）、ドイツのフランス支配（1940年）、パリ解放（1944年）、ドイツ無条件降伏（1945年）などは、彼が上記をはじめとした諸作品を上梓していた当時に生じる史実であった。だから筆者は、こうした時代に一方で、兵役に招集され、大戦中捕虜生活を体験した彼に対して、彼の〈意識〉に去来する問題が何であったかを想像するに難くない。それは彼もまたフランス国民の一人として、一刻も早く勝ち取りたいと願わずにおれなかった〈自由〉であり、この〈自由〉を措いてほかには何も考えられないと察せられる。

サルトルをはじめとした、多くの国民は〈自由〉の意味をおよそパリ解放に窺える「解放」として受け止め得たであろうが、彼はそれだけでなく、〈人間は自由である〉<sup>(3)</sup>との主張がゆえに、「解放」を当然と断じるとき哲学者の顔をすでに有していたと、かつこの哲学をば〈自由〉を基にし、〈自由〉を説き表現するためにかかわろう諸思想（観念）で展開せしめ成り立たせていたとみておくべきである。〈人間は自由である〉と同様な、もしくは〈自由〉に関し他の諸思想（観念）を取り込んだ文章のいくつかを、筆者なりにみて肝要と察知される、前記した諸引用文から拾い出すならば、いくつかは次のようになる。すなわち、〈自由はこの（即自の）無化よりほかの何ものでもあり得ない〉、〈自由はまさに、人間の中心に存在される無であり、…自らをつくることを強いる無である。…自由は人間の存在（être）の無である〉、〈自由とは人間（自ら）の存在（être）の選択である〉、〈自由は…未来によって定義される〉と彼にいわせる一方、〈自由はひとつの存在（être）であるのではない〉、〈この（人間の）存在（être）は、わたしたちに自由としてあらわれた〉、〈対自の自由は対自の存在（être）としてあらわれる〉し、しかして〈自由は実存（存在 existence）である〉と。さらに〈自由は本質をもたない。自由はいかなる論理的な必然性にも従わない〉と。

筆者は前段に記した〈自由〉を踏まえつつ、さらにその〈自由〉に関連させて、以下の諸点に答えおかねばならない。まず、〈自由〉は〈人間の存在（être）〉の〈無〉、〈選択〉であり、〈未来〉にかかわることが、それでも〈自由〉はそれ自身〈存在〉とはみられず、むしろ〈この（人間の）存在（être）〉が〈自由としてあらわれ〉くることが諒解される。次に、サルトルが〈自由〉は〈ひとつの存在（être）であるのではない〉と正確に指摘していたがゆえに、〈自由のあらわれとしての不安〉ならびに〈嘔吐〉はもはや彼自らの〈感覚〉や〈感情〉でなしに、〈自由〉なる〈観念〉を生じさせるのと同じ〈理性（思惟）〉の働きによって〈観念〉としてもたらされた語でしかなくなるが、そのうえ、上記中の〈存在〉の語にも括弧して〈être〉と付記させたが、〈対自の存在（être）〉と限定された訳語の〈存在〉を除いて、〈存在（être）〉が〈対自〉か〈即自〉に受け取られるのかその都度明示されていないことが明かされてくる。引用してきた文章において、たとえば、〈自由は人間の存在の無である〉というなかの〈存在〉は〈対自〉であり、それこそ〈自由はひとつの存在であるのではない〉としたなかの〈存在〉は〈即自〉であるべきなのに、彼はそのいずれかで読む判断を「わたしたち読者」に預けおいただけであるからなのだ。そして、〈être〉と〈existence〉という各〈存在〉の訳語にあっては、後者が前者のような〈対自〉か〈即自〉のいずれかになるのではなく、たえず〈対自〉をあらわすことが証明される。なぜなら〈対自は自由であり〉、〈自由は実存（存在）である〉といわれる以上、〈existence（実存）〉は〈対自〉にかぎられ使用されてくるからである。それゆえ先きに記した〈人間は自由である〉とした人間（または人間の存在）も〈対自〉とみなさずにおれなくなる。

加えて、サルトルの語る〈自由〉に関し取り上げた諸引用文のうち、〈自由はいかなる論理的な必然性にも従わない〉という、その解釈をどうみるかがいまだ残る課題になっているが、筆者はそれに答える前に、ここでは、あの〈対自〉や〈即自〉はおのおの何であり、それぞれにかかわるといえる〈不安〉〈嘔吐〉や〈無化〉〈無〉が彼にさらにいわせよう〈対自と即自との関係〉にあって、どのような〈関係〉を保有させるのかを筆者なりに確認し、まとめることを先きに試みておかねばならなくなる。一に、外的〈世界〉のことではなく、〈人間存在〉において、〈それが存在しないところのものであり、それが存在するところのものでない対自〉は〈即自の無化として現出する〉とされるからして、〈対自は無である〉ほかなくなる。しかしてこの〈人間存在〉に語られる、〈それが存在するところのものである即自〉は〈現存在〉であり、本来的な〈存在〉なる〈対自が欠けている存在〉となる。だから一に、同じ一人の人間（存在）をして〈対自〉や〈即自〉と見分けさせたいうで、〈対自と即自との関係〉を成り立たせしめるには、そこに〈無化〉ならびに〈無〉が介入させられずにいないと彼にいわせるわけである。〈対自と即自との関係〉が〈無化〉や〈無〉によってかたちづくられるといえるは以下の通りである。

Le pour-soi était néantisation et négation radicale de l'en-soi. ... Il (le pour-soi) est aussi, ...en-soi présent au milieu de l'en-soi. ... Le pour-soi, par nature, est l'être qui ne peut coïncider avec son être-en-soi.<sup>(4)</sup> (括弧内は筆者)

対自は即自に対する、無化や徹底的否定（無）であった。...対自はまた、...即自のただなかに現前する即自である。... 対自は、本来、自らの即自－存在と一致できない存在である。(括弧内は筆者)

それゆえかかる〈関係〉を現出させるのが、〈人間存在〉に「事物や他者」なる、〈即自的な相関者〉として対応する〈世界〉と異なる〈わたしの世界〉以外にないといわねばならなくなる。また〈徹底的〉を除く〈否定〉という表現は既出した諸引用文中の、〈対自が欠けている〉の〈欠けている〉や、〈対自とは...即自としての自己を失なう即自である〉の〈失なう〉や、〈対自は自らに対して固有な存在の欠如である存在である〉の〈欠如〉と同じであり、それらはすべて人間（即自）を〈無化〉した〈対自が無である〉ことを含意させる。と同時に「事物や他者」なる、外的〈世界〉と〈対自と即自との関係〉は何かと質さねばならなくなる。サルトルはこれに次のようにいう。

La chose c'est, ... ce qui est présent à la conscience comme n'étant pas de la conscience.<sup>(5)</sup>

事物とは、... 意識でない（もの）として、（即自の）意識に現前しているものである。(括弧内は筆者)

Il y a relation du pour-soi avec l'en-soi en présence de l'autre.<sup>(6)</sup>

対自と即自との関係は他人（他者）の現前にある。(括弧内は筆者)

筆者は両引用文から次なることを読む。すなわち、〈わたしはわたしの存在の根源そのものにおいて、他者を対象（客観）化すべき投企であり、あるいは他者に同化すべき投企である〉という既出引用文もここに参照させていえば、〈即自〉としての、〈わたしの存在〉と〈意識〉はその〈投企〉によって、〈他者〉ばかりか〈事物〉にすら〈現前〉させられているのだから、〈即自〉としての、〈わたしの存在〉と〈意識〉を〈対自〉に向かわせるだけか、〈他者〉や〈事物〉たる外的〈世界〉をも〈対象（客観）化〉せしめ、外的〈世界〉に〈同化〉することが可能になろうと。要は〈即自存在〉の〈意識〉をして外的〈世界〉に〈投企〉し〈現前〉させることで、〈即自〉なる〈意識〉は〈無化〉し〈無〉となり、その〈対自存在〉と〈わたしの存在〉との〈統合機能〉<sup>(7)</sup>を実現させる（後出引用文）。とまれ、〈即自〉を〈無化〉し、そこから〈無〉になるのが〈対自〉であるといわれる、まさにこの当の関係こそ〈対自と即自との関係〉をいい当てるのみか、かかる関係のうちの〈即自〉が同時に外的〈世界〉との関係をつくり上げているとされることにある。このように〈投企〉（もしくは〈選択〉や〈行動〉）することは、人間自らの〈存在意識〉を〈変身（変化）〉させるとともに、外的〈世界（社会）〉への〈現前〉を促すことであり、これを現実にするには繰返すが、〈投企（参加）〉〈選択〉〈行動〉をもって、自らを〈無化〉し〈無〉になることにある。だが上記したなかの〈現前〉は注意すべき語になる。これは〈わたし〉が、たんに外的〈世界〉の〈事物〉や〈他者〉をまのあたりにするのをさすだけでなしに、〈投企〉などを通し、そのいずれかを〈対象（客観）化〉し、これに〈同化〉することなのである。それだけではなく、〈現前〉は、〈存在することは、対自にとって、対自がそれ（即自）であるところの即自を無化することである〉という既出引用文や、〈対自は決して存在することがない〉<sup>(8)</sup>がこの前提になっては、次に記すように用いられる。

Un Pour-soi qui se néantise comme Présence au monde.<sup>(9)</sup>

この対自は世界への現前として（自己（即自）を）無化する。（括弧内は筆者）

Le (ce à quoi) n'être pas est structure essentielle de la présence. La présence enveloppe une négation radicale comme présence à ce qu'on n'est pas.<sup>(10)</sup>（括弧内は筆者）

何もの（か）でないことが現前の本質的な構造である。現前はわたしが何ものかでない（もの）への現前として、ひとつの徹底的否定を含む。（括弧内は筆者）

La présence du pour-soi à l'en-soi ... est pure identité niée.<sup>(11)</sup>

即自に対する対自の現前は、... たんなる否定された同一性である。

筆者にとって、〈対自と即自との関係〉をば、〈対自は即自の無化として現出する〉〈無化〉や、〈無は自らを無化するときにはか無であることができない〉〈無〉の〈関係〉において問うたとみえるのが〈現前〉に関し表現される、上記の諸引用文であるならば、その〈現

前)が何を示唆させようかである。〈わたし〉の〈存在意識〉が外的〈世界〉へ〈投企〉して〈現前〉することは、〈わたしの世界〉の〈即自(現存在)〉を〈無化〉しつつ、この〈即自の無化として現出する〉〈対自〉をも〈無〉にすること、要は〈対自は存在することがない〉ことをさす。〈即自〉での〈無化〉や〈対自〉での〈無〉は〈即自〉や〈対自〉のいずれもがたとえば〈無は存在(対自)としての否定である〉<sup>12)</sup>ような〈否定〉に与かっていわれる〈同一性〉で共通しているし、この〈同一性〉はもともと〈人間存在〉を〈対自はまた、即自のただなかに現前する即自である〉とみなす〈同一性〉から派生させられたにすぎなくなる。こうして〈人間存在〉は〈わたし〉の〈存在意識〉をして外的〈世界〉への現前)を実現せしめるとともに、外的〈世界〉は〈無〉なる〈対自〉の〈存在意識〉に〈ない(存在することがない)〉ときにあって、〈世界の無〉といわせる、それ自体の〈現前)を導かせる。

さすれば上記諸引用文から、筆者がサルトルにいう〈現前)を外的〈世界〉と〈わたしの世界〉との両方に対し用いるとみても、繰返しになろうが、〈現前)に含意されることは次のごとくであるといわねばならなくなる。すなわち、〈現前) (の語)は〈即自)に対する対自の現前)なしに、外的〈世界)への現前)もない〈関係)をもたせられる、換言すると〈世界)への現前)とは〈即自)や〈対自)たる〈否定された同一性)の〈存在意識)にはじめて外的〈世界)を語らせる〈関係)がかたちづくられ、外的〈世界)を〈世界の無(néant)〉にさせるということである。これが〈わたし)の〈存在意識)を〈無化)〈無)にしつつ、さらに外的〈世界)をも〈無)にする〈現前)の本質的な構造)であり、かつ〈徹底的否定)たる〈何ものかでない)という〈現前)の意味となる。〈対自は無である)や〈無が存在(対自)につきまとう) <sup>13)</sup>以上、外的〈世界)が〈存在することがない)〈世界の無)であると彼にいわせるも当然なのである。なぜなら各〈無)をもたらすほかないとされる、〈わたしの世界)と外的〈世界)の〈関係)はここでも、彼に〈(人間の)現存在性(即自)が、(人間の)自分というもの(自我)がなければ、世界もない)と語られていたのと同様な順次に則られて、〈無)を生じさせるところにあると受け止め得るのだから、両者の〈世界)に使われる〈現前) (の語)は、〈わたしの世界(存在意識)〉が外的〈世界)への現前)を可能にさえすれば、外的〈世界)もおのずと〈現前)されることになろう、要は〈人間存在)が外的〈世界)に〈現前)すると、〈人間は無を世界に到来させる存在である) <sup>14)</sup>ことになろうと、そしてこの外的〈世界)が〈人間)に〈現前)されると、したがってこうした〈関係)では、〈現前)は〈人間)が〈現前)する、その語だけでこと足りようといわずにおれなくなるからである。

〈現前)は筆者に〈人間(わたしの世界)〉の〈現前)をあらわすための語であると理解させるならば、外的〈世界(事物や他者)〉に用いられている〈現前)は何を語るのかを、たとえば〈世界が無の即自的な相関者である)とした既出引用文に借りて今一度確かめおく必要がある。筆者がみてきたところからは、引用文中の〈無(néant)〉は〈人間(対自)〉における〈無)であって、〈世界の無(néant)〉をさすのではなかった、つまり外的〈世界)が〈世界の無)となるには、〈人間(対自)〉での〈存在され)たり、〈存在(対自)につきまど)ったりする〈無)が欠かせなかったといわねばならなくなる。このとき外的〈世界)はどう〈現前)するかである。引用文が示すように、〈人間(対自)〉にとって、外的〈世界)は端から、〈即自的な相関者)たる〈即自存在)として〈人間(わたしの世界)〉

に〈現前〉し、〈即自存在〉にとどまったままなのであり、自ら〈無〉をもたらす〈存在〉ではあり得ないということである。

Le pour-soi surgit dans un monde qui est monde pour d'autres pour-soi. ... Le sens du monde lui (le pour-soi) est aliéné. Cela signifie justement qu'il se trouve en présence de sens qui ne viennent pas au monde par lui. <sup>(15)</sup> (括弧内は筆者)

対自はほかのさまざまな対自にとっても世界である（ような）世界に現出する。... 世界の意味は対自にとって、疎外される（ことにある）。換言すると対自は、対自によって世界に到来させはしない、さまざまな意味の現前に、自己を見出す。（括弧内は筆者）

Le Pour-soi par sa négation de soi devient affirmation de l'En-soi. ... Il arrive à l'En-soi qu'elle (l'affirmation) se réalise par le Pour-soi. ... Le Pour-soi qui se perdait lui-même pour que l'affirmation 《monde》 arrive à l'En-soi. ... L'En-soi, lui (le Pour-soi) est réellement présent; c'est dehors, sur l'être, qu'il y a un monde qui se découvre à moi. <sup>(16)</sup> (括弧内は筆者)

対自はその自己否定によって、即自（について）の肯定となる。... 対自がこの肯定を実現させることは（すなわち）即自に生じる（ということである）。...（換言すると）《世界》（としての）肯定が即自に生じるために、対自は自ら自己を失なう（ということである）。... 即自は対自に（対して）、現実に現前している。わたしに認められる世界が在るのは、外部に、存在にある。（括弧内は筆者）

上記二引用文に各記される〈世界〉（の語）には、誰もが〈わたしの世界〉や筆者にいう外的〈世界〉を当てはめることができる。いわずもがな、外的〈世界〉のことは前者の引用文中の〈世界〉であり、〈わたしの世界〉のことは後者のそれとなることをさす。と同時に、両引用文に共通して書かれる語に〈対自〉もある。この〈対自〉に関して、たとえば〈対自は無である〉とされることから、これが〈対自〉になれば〈無〉であるのか、〈無〉になれば〈対自〉であるかへの即答はともかくも、〈対自〉や〈無〉が外的〈世界〉とかわかりをみせると述べられていることは確かである。それは前者の引用文中に、〈世界の意味は対自にとって、疎外される〉と語られることでさえ諒解される。この文章での〈疎外される〉との表現は筆者に〈無〉に等しくなることを含意させる。そうみても〈疎外される〉のは〈わたし（自己）〉以外にないからして、〈世界〉は〈わたしの世界〉と捉えられかねなくなるやも知れぬが、しかし〈わたしの世界〉が〈意識〉としていう〈対自〉や〈無〉にあって、〈わたしの世界〉に現出する〈さまざまな意味〉を汲み取ったり、所有させたりすることはあり得なくなるのだ。それでも前者の引用文の〈世界〉は〈わたしの世界〉であるということに固執する人がいるならば、筆者は否と断じて、外的〈世界〉をあらわさずにいない引用文を以下に掲げおくほかないであろう。

Le néant ne peut être néant que s'il se néantise expressément comme néant du monde;

c'est-à-dire si dans sa néantisation il se dirige expressément vers ce monde pour se constituer comme refus du monde.<sup>(17)</sup>

無（なるもの）は無が世界の無として明白に自己を無化するときには、無であることができない、すなわち無（なるもの）はその無化において、世界の拒否として自己に成るためにとくにこの世界へ向かうときにしか、無であることができない。（括弧内は筆者）

〈すなわち〉以降の訳において、〈この世界へ向かう〉と明記された〈この世界〉こそ外的〈世界〉をあらわすのでなければならない。なぜなら〈向かう〉対象は〈わたしの世界（自己）〉に生じる対象以外ではなくなるにせよ、そこにとどまらせおくだけではないし、それどころか、〈向かう〉はさらにこの〈自己〉を対象に〈投企〉〈参加〉〈選択〉〈行動〉させる各語になる必要があるからである。そうみないことには、サルトルが〈投企〉以下の語を持ち出し主張する意味を失なわせる、要は〈この世界〉という記述が外的〈世界〉をさすことではじめて、〈投企〉以下の語が活かされると読み得る。また以上に立つまでもなく、〈世界の拒否〉なる語句も究極は〈わたしの世界（意識）〉の〈拒否〉にあるにしろ、しかし〈意識〉が〈対自〉となるうえでは〈この世界〉や〈世界の拒否〉つまり〈世界の無〉に出会うことが欠かせないのであり、そこから〈世界の拒否〉の語句中の〈世界〉は外的〈世界〉の謂にしかなり得ない。さらに〈無（なるもの）〉とした、総称をさす訳語は〈人間（対自）〉が〈無である〉かぎり、〈対自〉と同意に受け取られるのだから、〈対自〉や〈無〉はこうした〈存在意識〉である〈わたしの世界〉の一をあらわすとして語られるほかないし、そうなるともはやその〈存在意識〉を実現させるは外的〈世界〉たる〈この世界へ向かう〉しかないと再度いわねばならぬわけである。そこで筆者はひとまず、〈世界〉が〈わたしの世界〉だけで存しているならば、〈わたし〉の〈存在（意識）〉が〈対自〉とみられたり、〈疎外（無に）され〉たりすることで外的〈世界〉（現実）を〈意識〉に巻き込む必要はなからうということにする。それにしても、彼が用いた〈存在〉の語を「わたしたち読者」に〈対自〉か〈即自〉かの見定めを強いてくるのと同様、〈世界〉の語が〈わたしの世界〉か外的〈世界〉になるかの判断を下すのにも骨が折れるといわなくてはなるまい。

とまれ、サルトルが外的〈世界〉について語っていたことは何も以上の引用文によらずとも、すでに〈事物〉や〈他者〉に関した、既出引用文で一見したことから分かり得ると同時に、外的〈世界〉をば〈即自存在〉以外にみなかったと筆者に結語させる。なぜなら彼に〈人間存在は、… 即自存在の全体（自らと事物や他者）としての世界を自らのものにする企てである〉といわせたし、ここで〈世界〉と記させた際にあつていう外的〈世界〉は〈即自存在の全体〉の一部を構成するとみえるほか、〈わたしの世界〉でいう他の一とも〈関係〉してこようと捉えさせずにおかないからである。しかしながら、彼が質す外的〈世界〉はいかに〈存在〉すると受け取られるか、果たして〈わたしの世界〉とかかわるとい得るのかなのである。外的〈世界〉は、人間の〈存在（意識）〉が〈対自（無）〉になる〈関係〉でのみ〈存在〉すると、換言すると〈わたし〉が自らの〈存在（意識）〉を〈対自（無）〉にせず〈存在〉しないとみることができる。たとえ彼に〈人間と世界は相対

的な存在であり、それらの存在の原理は相対的な関係を有し、〈世界が無の即自的な相関者である〉と語られていてもだ。しかもここに立てば、外的〈世界〉はその〈即自存在〉たるを、〈対自（無）〉にかかわりなく、〈人間（わたしの）存在〉自身に〈関係〉させはしないと極論できるにちがいない。だから彼は外的〈世界〉に関し、この〈即自は決してそれ自身現前であり得ない<sup>88)</sup>さらには〈存在に対する対自の現前<sup>89)</sup>と述べたわけである（引用した最初の文章中の〈即自〉（の語）は〈即自〉としての〈人間存在〉にも兼用されるが、次の語句中の〈存在〉（の語）は〈即自存在〉としての外的〈世界〉を示すだけに用いられると察知し得る）。上記文章や語句が示唆させることから、〈対自〉が外的〈世界〉に〈現前〉するのはそれでも、外的〈世界〉が〈わたしの世界（意識）〉よりも先きに〈現前〉しているとみられてならないことを、かつ外的〈世界〉は〈人間存在（意識）〉が〈対自（無）〉であっても、〈即自存在〉のままにあるしかないし、〈人間存在〉が〈即自〉であっては、〈人間存在〉は外的〈世界〉に〈現前〉していないことを知るべきである。

以上のことは〈他人（他者）〉や〈事物とは、…意識でない（もの）として意識に現前している〉という既出引用文でも証しされる。サルトルが〈他人（他者）〉や〈事物〉に代表させる外的〈世界〉の〈現前〉は繰返すが、当の〈人間存在（意識）〉の〈対自（無）〉によってしか可能にならなかったと同時に、〈意識に現前している〉と記されるがゆえに、筆者には〈対自（無）〉となった〈人間存在（意識）〉は〈即自（存在）〉にならねばならなかったと読むことができる、つまり〈対自〉は、〈世界の意味は対自にとって、疎外される〉〈無〉を、しかして〈対自によって世界に到来させる〉〈無〉をもたらずからして、この外的〈世界〉（即自存在）の〈さまざまな意味〉を〈人間存在〉なる〈意識に現前〉せしめ、その〈現前に、自己を見出す〉という〈自己〉は、もはや外的〈世界の無〉の因となる〈人間存在（対自）〉の〈意識（無）〉にあって見出されるのではなく、〈即自〉たる〈人間存在〉においてでなければならぬことになる。この〈対自は無である〉とされたのは、〈対自は…自己自身の無の根拠である<sup>90)</sup>と述べることに等しかろうが、それでも〈対自（無）〉をもって、外的〈世界〉を所有することは不可能であると再度確認しておくとともに、筆者が前記していた問い「〈対自〉になれば〈無〉であるのか、〈無〉になれば〈対自〉であるか」は〈対自〉や〈無〉が同時的に捉えられども、〈対自〉なくして〈無〉が生じない〈関係〉にあるとみることができよう。

しからば〈人間存在（即自）〉は外的〈世界〉を所有できる〈関係〉にあるのか。「所有」とは〈人間存在〉がその〈即自〉において、外的〈世界（事物や他者）への現前〉に立ち会い、これを自ら（のもの）にし得る謂になるにせよ、自ら（のもの）にするは〈即自〉でさえ不可能であるといわざるを得なくなる。およそ〈人間存在（即自）〉はサルトルにあって、外的〈世界〉に〈現前〉することがない。確かに〈対自〉となったや否や、彼に〈人間存在は、自らに固有な（自己自身の）対自を即自-対自に変身させる〉といわせたことから、〈人間存在は即自存在であることに対する欲望である〉という、〈認識〉下の能力（欲望）をして〈即自存在〉に立ち返らせ、〈認識はたんに存在（即自）がそこに存在する（在る）ようにさせるだけである〉ことが、しかしてこの〈即自存在〉はさらなる〈対自（存在）〉を一度ならず二度も、いやそれ自ら死ぬるまで永久にめがけられねばならぬことが導き出されくる。これはもとより、〈人間存在〉として〈即自〉が窺われることを、その〈即自〉にて〈認識（思惟）〉が可能であることを明らかにする。かかる〈認識（思惟）〉にあっ

ては、〈対自が自らを捕らえたと思惟するときに、しかも投企されたひとつの無によって、自らが何であるかを自らに知らしめたと思惟するときに、対自は脱走する〉とされるからして、〈人間存在〉は〈即自存在〉になっていなければならない、要は〈人間存在は、対自としての自らを失なうことなしに、即自に達することができない〉と語られる通りなのだ。しかし〈人間存在（即自）〉がたとえば外的〈世界〉の諸対象を〈認識（思惟）〉するとして、その〈認識（思惟）〉はそれでも、何より〈自ら〉が〈対自〉へと〈向かう〉〈目標と目的〉を打ち立てんとすることで、外的〈世界〉に〈関係〉させる順次に従われるとみえるがゆえに、その〈即自〉を直ちに外的〈世界への現前〉に結びつけるはできないとい得る以上、せいぜい外的〈世界〉の〈さまざまな意味〉を推し測るしかなくなるし、これをして外的〈世界〉を「所有」せしめたり、外的〈世界への現前〉たらしめたりするといわせてはならない。

一方外的〈世界〉は外的〈世界への現前〉に導きはしない〈認識（思惟）〉によって、たんに〈即自存在〉に見立てられるにすぎなかった。それは外的〈世界〉を一度も〈対自存在〉にみることがないということであった。すでに触れたように、外的〈世界〉がそこに〈到来させる〉〈世界の無〉となるは、まず〈人間存在（対自）〉がそれとして〈疎外（無に）される〉ことに起因したと、だから外的〈世界〉はこの〈無〉と唯一〈関係〉させられたと受け取られるが、しかし〈対自（無）〉からする〈世界の無〉は〈対自（無）〉をもって語らせる〈無〉ゆえか、外的〈世界〉がもともと〈無〉であるか否かにかかわらずに、〈現出〉させられたのである。サルトルがたとえば〈わたしは、… 他者を対象（客観）化すべき投企であり、他者に同化すべき投企である〉と述べるにしろ、〈対自〉がめざすは外的〈世界のこれこれの個別の対象に対する、わたしの諸関係にかかわる一投企ではなく、わたしの世界-内-存在全体にかかわる一投企である〉かぎり、この〈投企〉は当然、外的〈世界〉にでなしに、〈わたしの世界〉に〈向〉けられねばならぬばかりか、〈わたし〉が〈対自〉になるべき〈選択〉や〈行動〉を課すことと同然であり、しかも〈人間存在（即自）〉や外的〈世界〉なる〈即自存在〉のために試みられるのではなかった。なぜなら〈人間存在（対自）〉が〈無〉であるはともかく、〈人間存在（即自）〉が〈無〉であるといわれはしないし、この〈人間存在（即自）〉から外的〈世界〉なる〈即自存在〉へ〈関係〉させ得るものは何も見当たらない、換言すると外的〈世界〉が〈何ものかでない〉ことさえ〈人間存在（即自）〉に伝えはしないからである。こうした〈関係〉は実は〈人間存在（対自）〉にあっても同様であると思われる。このことは〈投企〉を例にみても明確になろう。〈投企〉は〈わたしの世界-内〉での〈選択〉や〈行動〉であり、〈投企〉が〈わたしの世界-内-存在全体にかかわる〉という〈存在全体〉は〈対自〉や〈即自〉を含ませる表現であった。この〈対自〉は〈投企されたひとつの無〉に対応（関係）した。だからその対応（関係）は、外的〈世界〉から〈人間存在（対自）〉への〈関係〉を語るのではなかったわけである。しかし〈わたし〉からする〈世界-内-存在全体〉での〈対自〉と〈即自〉との〈関係〉は〈対自〉なくば〈即自〉と、あるいは〈即自〉なくば〈対自〉と〈関係〉しなかったことにある。これを明かすは〈無化された即自と、投企された即自との間において、対自は無である〉といわせた引用文である。筆者はこの文章を以下のごとくに読む。すなわち文章中の、〈無化された即自〉という語はいまだ〈対自（無）〉ではないことを、同じく〈投企された即自〉はすでに〈対自（無）〉であることを、〈間において〉と

いう〈間〉は〈無化〉から〈無〉となる時間（経過）を示すことを、だからその〈対自は無である〉ことを意味させると。〈わたしの世界－内－存在全体〉において、〈即自〉での〈無化〉から〈対自〉での〈無〉に至るまで（さらにこの〈対自（無）〉から〈即自（または即自にかかわるわたし）〉に戻るに）どれほどの時間がかかるか分からねども、〈即自〉の〈対自〉（そのうえ〈対自〉の〈即自〉）への、一連の〈変身〉がたえず〈人間存在〉に運命づけられる。しかし〈対自（無）〉のときですら、外的〈世界〉に〈無は存在しない〉のだ。しかして〈即自存在〉でしかない、外的〈世界〉が万に一つ〈人間存在（対自や即自）〉に〈現前〉できるとみられたにしても、外的〈世界〉は〈何ものかでない〉〈事物や他者〉以外になり得ない。〈投企〉したことで〈無は存在される〉ほかなくなった〈人間存在（対自）〉にあっては、外的〈世界（他者）〉をして〈対象（客観）化〉や〈同化〉せしめることはもはや不可能である一方、〈人間存在（即自）〉の方はさらに〈事物や他者〉への各〈認識（思惟）〉を重ね、それぞれに〈向〉けた〈投企〉を〈企て〉たり〈欲（願望）〉したりするしかない。だから外的〈世界〉と〈関係〉させるには少なくとも、〈わたしの世界〉からの、〈わたし〉の〈投企（選択や行動）〉にて成る〈対自〉が欠かせないし、〈対自〉なくば、〈わたしの世界〉と外的〈世界〉との〈関係〉が真に〈関係〉するのでないにせよ、まったくみえてはこないといえるわけである。

要するに、外的〈世界への現前〉は、〈わたしの世界－内－存在全体〉が〈投企（選択や行動）された〉〈即自に対する対自の現前〉を可能にしたとき、これに続いて〈現出〉される、換言すると外的〈世界〉は〈わたしの世界－内－存在全体〉につねについて回るのであって、〈わたしの世界〉に〈先き立つ〉ことがないだけか、本来〈わたしの世界〉と〈関係〉を有しないということにある。かかる〈存在全体〉とは繰返すが、〈対自〉と〈即自〉とによって成ることを、または〈即自に対する対自の現前は、… 否定（無に）された同一性である〉ことを、さらには〈即自（の無化）と対自（の無）との関係〉をいい当てることをさすのであった。しかし〈対自〉により〈否定（無に）された同一性〉たるべき〈即自〉はいかにして〈即自〉になり得たかである。これを明かすは筆者が「後者」と書き記した引用文を除いてない。そこには〈即自〉が〈対自〉の〈自己否定によって、即自（について）の肯定となる〉と、同様に《《世界》（としての）肯定が即自に生じるために、対自は自ら自己を失なう》と語られる。されど筆者にとって気にかかるのは、上記「後者」とした引用文（の中身）がまことに都合のよい論理で仕上がっているとみえることである。つまり〈否定〉を〈否定〉のままに〈肯定〉することがだ。確かに〈否定〉は〈対自〉での〈否定（無）〉であり、〈肯定〉は〈即自〉での〈肯定〉であろうが、しかし〈否定〉や〈肯定〉のいずれも、もはや〈対自（無）〉にではなく、〈投企（選択や行動）〉以前の、あるいは〈対自（無）〉以後の〈即自〉においてみられる、しかもデカルトにいう〈思惟する〉能力（ここは〈否定する〉や〈肯定する〉になろう）に窺える〈思惟（理性）〉からもたらされたと断じる以外なくなる。要はこのいわば〈否定〉の〈肯定〉は〈人間存在（即自）〉下の〈思惟（観念）〉をもってしか導き出されなかった。〈思惟（観念）（する）〉ほかないことは、かの引用文の最後を飾る文章〈わたしに認められる（se découvrir）世界が在るのは、外部に、存在にある〉でも明らかにされる。再帰代名詞（se）を省いた〈découvrir〉には「能動」的語意「認める」があるからして、これを利用すれば、「認める」も〈思惟する〉に与する一能力であり、例の〈肯定（する）〉は〈否定（する）〉を「認める」こと

と同意になる（また〈自己を見出す〉と書かれた〈見出す〉さえ〈肯定（する）〉や「認める」と同じである）。だから上記文章中の代名動詞（「受動」的語意）〈認められる〉すら、〈人間存在（即自）〉のもとで可能になる能力でなくてはならなくなる。そのうえ見過ごされてならないことは、この〈人間存在（即自）〉が〈対自〉をばあたかも〈否定（無）〉と判断し、〈否定（無）〉を〈肯定（する）〉、これらのことこそ、〈存在（論）〉を語る以前になくはならぬ〈認識（論）〉（を質すこと）になることにある。このことは追って検討し、ここでは〈即自〉が〈対自（無）〉の〈現前〉を〈認識（する）（肯定するや認める）〉ことで、〈人間存在（対自や即自）〉ははじめて〈わたしの世界-内-存在全体〉として〈一致する（coïncider）〉というにとどめおく。

また筆者はここに、かの引用文の最後の文章を参照して、〈わたしの世界-内-存在全体〉と外的〈世界〉とは真に〈関係〉するとみてよいかを確認しておく必要がある。前段までに語ったことを踏まえると、一に、かかる文章中に記される〈世界〉は、要は〈わたしに認められる〉がゆえの〈世界〉は〈わたしの世界〉をさしたと、一に、この〈世界〉の語に後続する語句〈外部に（ある）〉や〈存在にある〉はそれぞれ〈対自に（ある）〉や〈即自にある〉に換言され得ると読む。一に、一方の〈外部に〉を〈対自に〉と理解したは、〈対自〉である以上、〈意識〉は〈意識〉をその〈即自〉のままにしておくのでなしに、ひとまず外的〈世界〉（外部）に向けて〈投企（選択や行動）〉させずにおれないことにあった。一に、他方の〈存在にある〉という〈存在〉は〈l'être〉であるからして、筆者がこれまで指摘してきた例にみられるように、〈対自〉と受け止められる嫌いもなくはないが、しかし〈即自〉と捉えてはじめて、〈わたしの世界-内-存在全体（対自と即自）〉の〈一致する（coïncider）〉ことが、〈自らをつくる（se faire）〉ことができるといわねばならぬことにあった。この上記のことからも、筆者が先きに「後者」と書き記した引用文は、〈わたしの世界-内-存在全体〉としての〈対自と即自との関係〉がいかにあるかを記すにとどまっていたが、だからかそこに「前者」とした引用文に語られる、外的〈世界〉のことをかかわらせる（挿入させる）余地のないことが明らかになる。だがこうした「前者」ならびに〈事物〉や〈他者〉なる外的〈世界〉のことをあらかず諸引用文が散見するも確かなことであった。さすれば、外的〈世界〉は何のために書かれたのか、〈わたし（の世界）〉と〈関係〉させるためではなかったのか。このことをそれこそ〈肯定〉する場合でも、〈関係〉させられる根拠がみえてこない。筆者にはせいぜい、サルトルが外的〈世界〉を〈わたし（の世界）〉と〈関係〉あるごとくに装わせていたとしか受け取ることができないのだ（この点をヴェーユに比較させてもだ）。それゆえ筆者は、彼が哲学を完成せしめていたとて、かかる「見せかけ」がゆえに、彼の哲学は「観念論（的認識論）」であることを暴露させる以外にないと極論し得るわけである。

サルトルが〈人間と世界は相対的存在である〉と述べていたにもかかわらず、一方で〈投企〉は外的〈世界のこれこれの個別の対象に対する、わたしの諸関係にかかわる一投企ではな）いといい、さらに〈人間存在（対自）〉をして外的〈世界への現前〉を可能にさせると語る、こうした論理は、筆者にすれば「矛盾」を禁じ得なくなるが、彼にすれば、〈対自〉をめざす〈投企〉によって、または〈投企〉に伴われて、外的〈世界〉が〈わたし（意識）〉にかかわり〈現前〉するように受け取る以外になかったにちがいない。これすなわち、外的〈世界〉との〈関係〉がみられることを「装う」ことである。だが、外的〈世界への

現前)は〈投企(対自)〉のときにかざられるのであり、〈人間存在(即自)〉のときにあつては、外的〈世界〉は〈わたし(意識)〉に〈現前〉してはこない。その証左は彼が〈即自は対自に(対して)、現実に現前している〉というにある。なぜなら〈即自〉が〈現前〉するは〈対自に(対して)〉なのであって、外的〈世界〉に対してではないと見て取れるほか、〈対自〉と〈即自〉は相即不離の〈関係〉を有するといえるからである。以上を繰返すと、外的〈世界〉から〈人間存在全体(対自や即自)〉に〈関係〉させる「事物や他者」は何もないとみえるがゆえに、〈人間と世界〉における、外的〈世界〉の〈わたしの世界〉への〈関係〉はない、要するに疾うに触れた、〈投企〉時での〈対自〉としての〈否定〉や〈わたし(意識)〉に立ち返るときでの〈即自〉としての〈肯定〉(の各語)を例にいうと、〈否定〉や〈肯定〉は〈意識(わたし)〉によりもたらされるだけであつて、とりわけ〈否定(無)〉は外的〈世界〉に〈存在しない〉し、あまつさえ外的〈世界〉は自らがかかる〈否定〉や〈肯定〉になるなどと一声を発したり、それぞれであると〈わたし(意識)〉に教えてくれたりはしないということである。これをなおもくどいほどに語ると、〈わたし(意識)〉をして〈対自〉や〈即自〉と、あるいは各〈否定〉や〈肯定〉といわせたは〈わたしの世界-内〉のことにしかかわるほかないのだから、〈わたしの世界-内〉において〈対自(否定)〉と〈即自(肯定)〉を繰返すは、〈わたしの世界-内-存在全体〉を〈投企(選択や行動)〉した、〈対自〉としての、いちの場(状況)に立ち合わせ、その暁の度に〈即自〉として〈認識〉させたにせよ、そこには〈わたしの世界〉との〈関係〉がみえているだけであつて、その場(状況)すなわち外的〈世界〉との、ましてや外的〈世界〉のすべてとの〈関係〉が〈わたし(意識)〉に求められてくるのではないと結語することにある。そう捉えずにおれなかったのは思うに、人間〈存在全体(対自や即自)〉が外的〈世界(事物や他者)〉を〈わたし(意識)〉に受容し、そのうえで〈認識〉させようとする〈関係〉になかったからである。

それでも「わたしたち読者」がサルトルにいう、例の〈不安(嘔吐)〉を受容される能力と見立てては、外的〈世界〉と〈関係〉するではないかと異議をさしはさむやもしれぬ。〈不安(嘔吐)〉はたとえばヴェューユにいう〈不幸〉と名称からして違えども、〈感覚〉や〈感情〉なる受容(受動)能力としてもたらされることに間違いがない(ただし〈不幸〉は〈感覚〉により生じるとはみられなかった)。だが筆者がすでにわずかに触れ、また後段でも明らかにするように、彼は〈不安(嘔吐)〉を〈感覚〉や〈感情〉なる〈受動〉能力にかかわらせずに、たんに〈実存〉の契機とみなすだけであつたのだ。ちなみに、筆者が記した「外的〈世界〉のすべて」に関し、ヴェューユに当てはめられることは、彼女がその「すべて」を〈不幸〉にばかりか、〈世界の美〉にみていたことにある(彼女に窺える哲学は〈不幸〉や〈世界の美〉の各受け入れをもって出発し展開されていた)。こうした見方に対し、彼は外的〈世界〉を〈わたし(彼)の世界〉に〈関係〉させなかったがために、当然彼女にいう〈世界の美〉を問う必要さえなくなるが、しかし他方の〈不幸〉については、『存在と無』のなかに、次なる文章を書き残すことになる。すなわち〈不幸は存在する。不幸は労働者の条件を構成している〉<sup>20)</sup>と。この引用文から筆者は、彼も彼女と同様、〈不幸〉が当時の〈労働者〉に申し掛かる現実を目の当たりにしては、〈不幸〉を〈認識〉していたと知る。さすれば、〈労働者〉は〈他者〉にいい換え可能なのだから、こう語られてくるかぎり、〈労働者(他者)〉たる外的〈世界〉は〈わたし(彼)の世界〉と〈関係〉する

とみえるからして、「〈関係〉しない」と筆者が記したのは訂正されねばならぬであろう。だが訂正は必要がない。なぜなら引用文はよく読むと、〈わたし（彼）の世界〉から〈他者（外的世界）〉へという視点に立って、この前者から後者に〈関係〉させるだけであり、およそ後者の前者への〈関係〉を語り説くのでないことが諒解されるからである。それに加えていえるは、〈他者（外的世界）〉の〈不幸〉は〈わたし（の世界）〉の〈不幸〉と別ものだから、〈わたし（の世界）〉に〈関係〉しないことにある、つまり〈労働者（他者）〉であり得ない〈わたし〉はこの〈他者（外的世界）〉と無〈関係〉であると筆者にいわしめたがゆえに、〈不幸〉を「受容」せんとするなどは一切不要であることにある。

以上を明かし得た証拠はほかでもない、サルトルが〈人間と世界〉の〈第一義の相対的な関係〉は人間存在から世界に向かう関係になる。…かかる関係によって、わたしのために、世界があらわれるようになる」と記した、既出引用文にある。しかも筆者がこれに続けて取り上げ、疾うに一見した、〈世界が無の即自的な相関者であるかぎりには、世界は、もともと、わたしの世界である〉という引用文も、彼がこの〈人間と世界〉（の〈関係〉）をどのようにみていたかを知るうえで見逃しにできなくなる。その決め手となるは、ここに加えて語られる、〈わたしの世界〉に〈（人間の）現存在性（そのもの性）〉が、〈（人間の）自分というもの（自我）がなければ、世界もない〉とされた文章である。まず上記した諸引用のうち、〈わたしの世界〉という表記以外の〈世界〉は、筆者の指摘した、外的〈世界〉をさすことになる。そして彼は〈わたしの世界〉なしに、外的〈世界もない〉と断じたのだから、外的〈世界〉は〈わたしの世界〉に組み込まれて捉えられるとみなし得るわけである。だが同時に、彼が〈人間存在から（外的）世界に向かう関係になる〉とも明記するは、〈人間と（外的）世界〉とに区別した見方を示唆させるからして、筆者も一度はこの見方に立ってかかる〈関係〉をそれぞれにおいて問うことにした次第である。したがってここから筆者に察知されるは、一に、〈人間存在〉が外的〈世界に向か〉わんとする、この〈存在〉は〈対自〉と呼ばれるほかに、また〈即自存在〉でしかない外的〈世界は、もともと、わたしの世界である〉とされた、〈わたし〉なる〈（人間の）現存在（性）〉は〈即自〉にみられると、一に、〈対自〉や〈即自〉すなわち〈人間存在（全体）〉をもとにした、彼にいう哲学が何か歴然としてくるということである。この前者の〈対自〉と〈即自〉とを前提にして、彼にいう哲学が成るとみえるは、それでも〈わたしの世界〉にかざられて語られるにすぎない。ならば筆者は、前段に記した〈労働者（他者）〉の〈不幸〉は〈わたしの世界〉ではいかにかかわると見て取れるかを今一度確かめておかねばならぬであろう。（次段落の表記〈わたし（即自）〉は前記の通り、換言語でないことと断わりおく。）

それは〈人間と（外的）世界〉が〈関係〉するとみなされても、サルトルにあって、〈人間（わたし）〉の方から外的〈世界〉に〈関係〉させる点に、要は〈わたしの世界〉が外的〈世界〉に比べ優位に立つだけに、外的〈世界〉の方から〈わたし（の世界）〉に「受容」されるものは何もない、だから〈労働者（他者）〉からくる〈不幸〉でさえないし、〈実存〉の契機として掲げられた〈不安（嘔吐）〉でもなくなる点にある。〈不安（嘔吐）〉すら外的〈世界（事物や他者）〉をして「受容」せしめられるものに見立てられないのは、〈不安（嘔吐）〉が〈実存（〈わたし〉のなかで〈対自〉をめざす〈存在〉）〉の契機にしかならないと、さらに〈わたし（彼）〉が外的〈世界（事物や他者）〉より生じたという〈不安（嘔吐）〉を〈わたしの世界〉として語らせたとみえるがゆえに、〈不安（嘔吐）〉はこの外的〈世

界) からくる「受容」されるもの(能力)ではなくなると、だから〈わたし(彼)〉は〈不安(嘔吐)〉をつくり出すことになる。彼にいわせるからである。かりに〈不安(嘔吐)〉が〈不幸〉に等しくみられたにしても、この〈不幸(不安や嘔吐)〉は当然、〈労働者(他者)〉よりくる〈不幸〉とは異なるばかりか、〈不幸〉とみる〈不安(嘔吐)〉は〈わたし(対自)〉に発するのでなしに、〈わたし(即自)〉に生じていなければならぬということである(〈不幸〉は彼において、〈わたし(即自)〉の方から〈関係〉するといえる〈不幸(不安や嘔吐)〉以外、〈わたし(即自)〉にかかわらない、いわば人ごとの〈不幸(これは不安や嘔吐(なる不幸)ではない)〉として〈関係〉するのみである。だが人ごとの〈不幸〉との〈関係〉も再度確認するに、〈わたし〉が〈対自〉となって外的〈世界(他者)〉に〈関係〉せんとする試みなくば、人ごとの〈不幸〉との〈関係〉さえみえてこないということだ。「〈不安(嘔吐)〉は〈わたし(即自)〉に生じ」と書いた「生じる」が、〈わたし(即自)〉が「〈不安(嘔吐)〉をつくり出す」と述べた「つくり出す」に換言され得るならば、「つくり出す」とは、筆者に指摘された通り、彼が〈不安(嘔吐)〉を外的〈世界〉の〈事物(現象)〉として「受容」する〈受動(能力)〉ではなく、外的〈世界に向かう〉とされるかぎり、〈理性(知性)〉による〈思惟(観念)する〉〈能動(能力)〉でもって、その〈事物(現象)〉を〈不安(嘔吐)〉と名付けては、〈不安(嘔吐)〉を〈感覚〉や〈感情〉の各能力にかかわらせないだけか、〈実存〉の契機(原因)にみなしたことを含意させるにちがいない。しかも例の〈投企〉〈参加〉〈選択〉や〈行動〉の諸〈観念〉が、なかでも〈自由〉の〈観念〉が彼に〈不安(嘔吐)〉よりか先きに閃き〈思惟〉されていたと思えるからして、〈自由〉をはじめとする諸〈観念〉を成り立たせるにあつて、諸〈観念〉は彼にいう、〈観念的な命題の脈絡にかかわる〉〈必然性〉や〈論の筋道〉に従ったうえでの、たとえば「因果関係」としてあろう「果」とみなされるならば、彼の語る一方の〈観念〉が「因」に充当せずにはないは当然であろうし、彼はその「(原)因」をば〈不安(嘔吐)〉(の観念)にみることができるであろう。

しかしながら〈人間存在〉にとって〈欲(願)望〉されよう〈自由〉(の観念)もサルトルにすると、〈労働者(他者)〉の〈不幸〉に〈投企〉などして勝ち取られる〈自由〉ではなく、自らの〈人間存在全体(対自や即自)〉になるためにあつた。〈労働者〉が何かは当時も今も、まずはマルクス主義思想を除いて語り得ない。彼自身は1950年代(45歳)以降、マルクス主義思想に関心を抱き、接近していた(ヴェーユはこの思想に19歳頃から興味を持ち続けていた)とされる。だが外的〈世界〉から〈人間存在〉へではなく、〈人間存在から(外的)世界に向かう関係になる〉とサルトルに語られた〈人間と(外的)世界〉にあつて、彼は当時の〈労働者(他者)〉の〈不幸〉の現状を、かつマルクス主義思想の特徴であろう〈物質〉(あるいは歴史の法則(必然性))を〈わたしの世界〉にかかわらせないと見定めおくのだから、社会・政治や労働運動に参加する(s'engager)一方、〈労働者〉との連帯関係を深めるべく活動したにせよ、たとえばヴェーユのように、〈労働者(他者)〉の〈不幸〉を自らに〈受け入れ〉、背負うことはなかった。〈人間存在(サルトル)〉が〈不幸〉にさいなまれる〈労働者〉を代表させていう外的〈世界に向かう〉は、外的〈世界〉がこうした〈他者〉になるにもかかわらず、この場合も不思議なことに、自らの〈実存(存在)〉のためにしかなくなると受け取られるにちがいない。だからサルトルが「わたしたち読者」をしてマルクス主義思想に共感せしめるには、その説得力とこれに対する、

サルトルの主張の迫力が欠けてみえるばかりか、マルクス主義思想をサルトルの哲学に適合させようと引き合いに出すは無理に思えるし、彼自らの哲学を「矛盾」に陥らせるだけである。繰返しいうが、〈わたし（サルトル）〉が外的〈世界〉を「受容」もしよう〈感覚〉や〈感情〉をまるで無視したかのごとくにして、強因に〈理性（知性）〉のみを働かせて、例の「〈対自〉としての〈否定〉や〈即自〉としての〈肯定〉」という（鉤括弧の）諸〈観念〉を「つくり出（作為）」し、またこれと同様に、「つくり出（作為）」された〈不安（嘔吐）〉たる〈観念〉の方をば〈実存〉の契機にみなす以外になかったり、まして〈労働者（他者）〉の〈不幸〉の因をヴェーユのようにいづくに求められるかさえ質さなかつたりせず、たんに〈わたし（即自）〉が〈対自〉になることを課して外的〈世界〉に〈関係〉させるにすぎない哲学が彼にめがけられていたといえるのである。

その哲学はサルトルの諸引用文を掲げていたなかで、たとえば、〈存在だけは存在するのだ。この観点からみると、観念論的立場を完全に放棄することが必要であるように思える。だからとくに、対自と即自との関係を、根本的な、存在論的關係として考察することが可能になる〉と表現されてくるであろう。しかしこうした主張に反し、筆者はこれまで触れおいた通り、彼の哲学は〈観念論〉（的認識論）（哲学）であると、もしくは「存在論すなわち認識論」でしかないと述べたのだから、何ゆえそう断じ得たのかを以下で筆者なりの証明を試みておかねばならない。これを検討するに、筆者は、〈意識は意識自身の存在でなければならない。（だが）意識は一度でさえ存在によって支えられていない。…意識は意識が存在するところのものではない〉と〈意識〉に関し語られた引用文を再度持ち出しては、彼のいう哲学に窺える問題点を浮き上がらせることにする。ここに〈意識〉を取り上げたは、〈意識〉がこの段落での最初の引用文の冒頭に記された〈存在だけは存在する〉との〈存在〉を形容する語になるばかりか、引用文中の〈対自と即自との関係〉にもかかわらざるを得なくなるとみえるからである。それは〈対自は、それ自らの意識存在の…根拠である〉との既出文章によって諒解されることである。だから〈存在〉が何の〈存在〉かには、〈意識自身の存在（意識存在）〉が充当し、〈意識自身の存在（意識存在）〉はこの〈対自〉以外に、〈即自〉をもさすと受け取り得るわけである。要するに、〈意識は意識自身の存在でなければならない〉といわせるなかでの、この〈存在〉すなわち〈現存在〉の〈肯定〉が〈即自〉と呼ばれるあり方になると、また〈意識が存在するところのものではない〉といわせるなかでの、この〈存在〉の〈否定〉が〈対自〉と呼ばれるあり方になると読み得るし、さらにこうした〈対自と即自との関係〉は、〈対自とは自己を意識として正当化するために、即自としての自己を失なう即自である〉とされる、いわば「相即不離」の〈関係〉にある。したがって一に、〈対自〉は〈即自〉とともに、〈意識〉の代わりに用いられる各語になることが、一に、〈意識〉が〈対自〉であるとき、〈意識の中心に現出する無は、存在するのではない〉と、だから〈対自（意識）は無である〉といわせるにもかかわらず、彼は〈対自〉をいまだに〈自己〉として、なおもこの〈自己を意識として正当化〉しようと企てていたことが推し量られる。つまり後者の「一に」での推量は、〈即自〉が〈意識〉として捉えられ、そこに〈認識〉をみるのに比べ、〈無である〉〈対自〉でも、〈意識（認識）〉なる〈自己〉を〈存在〉せしめることを示唆させずにいない。だから筆者は〈無〉はどんな〈無〉なのかをはじめとして、彼にいう哲学が不思議以外の何ものでもなくなるといっておいたのだ。

上記のことを踏まえるならば、サルトルに窺える哲学は彼の主張通り、〈対自〉や〈即自〉の各〈存在〉を述べ語るがゆえに、〈存在論〉(哲学)になるであろうし、この〈対自と即自との関係〉にあっては彼に、たとえば〈対自は無である〉は〈即自のたんなる無化より以外のことではない〉、あるいは〈対自は即自の無化として現出する〉や、その〈即自〉にとって、〈自らを無化するためには、存在するのでなければならぬ〉といわせるごとく、こうした〈対自〉の〈無〉と〈即自〉の〈無化〉が例の〈投企〉などの介入を不可欠にさせられるがゆえに、当然〈即自〉の〈無化〉から〈対自〉の〈無〉への順に従う、〈存在論的關係〉をかたちづくることになる。だがこの〈無化(即自)と無(対自)との関係〉を有するのがあの〈意識〉であれば、〈意識〉はかかる〈関係〉にどうかかわるのかである。〈意識〉は〈自ら(自己)〉の、要は〈わたし〉の〈意識〉として表記されるし、何より〈意識は何ものかについての意識である〉ことだった。これがゆえに、つまり〈わたし〉の〈意識は何ものかについての意識である〉ゆえに、〈意識〉に現出するは、〈意識〉が〈何ものか〉たる〈事物や他者について(もつ)〉や〈わたしについて(もつ)〉〈意識〉なのであり、〈事物や他者〉自体や〈わたし〉自身のことではなかった。するとここに〈事物や他者について〉取り上げるはともかく、〈わたしについて〉とは〈わたしの存在〉や〈わたしの世界-内-存在〉という表現もみられるのだから、〈わたし〉の〈対自〉や〈即自〉なる各存在〈について〉質すことであるのか。否、この〈対自〉や〈即自〉のことは〈意識〉の〈存在〉と捉えられていた。さすれば〈わたし〉が〈対自〉や〈即自〉としてではなしに、〈意識〉が〈対自〉や〈即自〉になるほかなくなろう。このことは、〈意識は意識それ自身に、即自に向かう存在論的な起源を含み持っている〉や〈意識は…存在するかぎりでの認識する存在である〉ことによって証左される。要するに、〈認識する〉〈即自(存在)〉の〈意識〉が〈対自(存在)〉になるべく、〈即自(事物や他者すなわち世界)に向かう〉からして、〈即自〉や〈対自〉は〈意識〉に〈関係〉すると、また〈わたしの〉が形容された〈意識〉(の語)であるにせよ、これは〈意識〉にたんに〈わたしの〉がかかるとみえるからして、その〈即自〉や〈対自〉を〈わたし〉に〈関係〉させはしないということである。別言すると〈何ものか〉という対象をめがける〈意識〉は〈事物や他者〉ならびに〈わたし〉をよりか、〈(わたしの)意識〉を対象にすることにある。彼がその〈意識〉を優先的に問うことは思うに、〈事物や他者(世界)〉や〈わたし〉をして〈意識〉を〈関係〉せしめるのでなしに、〈意識(の存在)〉を明るみに出したうえで〈世界〉や〈わたし〉の各存在を〈関係〉させることになる。だから彼にあって、少なくとも〈世界〉との〈関係〉は〈人間(意識)の世界への関係〉であり、〈世界の人間(意識)への関係〉でないことを証明せずにおれないといえるわけである。

一方〈意識〉と〈わたし〉との関係はどうあるかを確かめるべく、筆者は何度も記す、〈対自とは自己を意識として正当化するために、即自としての自己を失なう即自である〉という引用文を参照する。これに聞くかぎり、サルトルは〈自己(わたし)〉を〈対自〉や〈即自〉なる〈意識〉にかかわらせているからして、〈意識〉と〈自己(わたし)〉とが無関係でないことを証明させる。つまりここでは〈自己を意識として正当化〉させるうえでか、〈意識〉で用いる〈対自〉や〈即自〉を〈自己(わたし)〉に宛がうことが示唆される。だが〈自己(わたし)〉を〈現存在〉たる〈即自としての自己(わたし)〉とみなすことは〈正当化〉されようが、果たして生身の〈わたし〉自身が〈対自〉すなわち〈無〉であることができ

ようか。不可能なのだ。彼に〈意識の中心に現出する無〉といわせる以上、〈無〉になるのは〈意識〉であって、〈わたし〉自身ではあり得ない。だから彼は〈自己（わたし）を意識として〉の〈わたし〉に見立てるために、〈わたし〉の〈正当化〉を試み、もって〈意識〉に〈わたし〉を関係させたと受け取るほかないのである。このことはまた、彼が〈対自〉においてすら、〈対自は無である〉にもかかわらず、〈意識〉が在るごとくに、〈意識〉を〈正当化〉しようとする事と同様である。それに〈意識〉に〈わたし〉を関係させることは、〈わたし〉が〈意識〉を介してあらわれる関係にあることを示唆すると、要は〈意識〉をして、〈意識〉が、そして〈わたし〉が〈何ものか（について）〉を各〈意識（認識）〉し得る、〈即自〉のままの〈存在〉にせしめるだけでなく、〈意識〉に〈即自としての自己（わたし）を失なう〉その〈自己（わたし）〉を今度は〈意識（対自）〉において〈つくる（se faire）〉こと以外になかったと繰り返しておく。なぜなら〈意識〉自体は〈意識（認識）〉として〈つくる〉をたえず〈志向（intention）〉せども、かかる機能にとどまっているのであり、〈つくる〉結果を実現させるは〈意識（認識）〉でなしに、〈わたし〉に委ねられねばならなくなるからである。〈わたし〉を〈つくる〉とは本来的な〈自己（わたし）〉をめざす謂であるが、それに向けて〈わたし〉を〈投企〉〈参加〉〈選択〉〈行動〉させることを意味した。だから、このいずれかを可能にしたとき、〈意識〉は〈対自〉であり、〈即自〉ではないといえるのであって、〈対自〉や〈即自〉を〈わたし〉に当てはめて、〈わたし〉がそうした区別を受けるとみてはならないし、〈思惟（観念）〉として〈認識〉された、これらの語を通して、その〈意識〉を〈対自〉に向かわせるは〈わたし〉を措いてほかにはないにせよ、彼が一方に〈意識〉を主張し、他方にそれで収まりがどことなく付かないと知ってか、〈わたし〉を持ち出すは、〈意識〉を基調にした、彼の哲学に〈わたし〉が付け足しにされたにすぎないのではないかとの印象を拭え切れなわけである。

サルトルにいわせる〈わたし〉を、たとえばヴェーユが〈わたしが意識するものについて意識する〉と記した、その〈わたし〉と比べてはどうか。〈意識するもの〉とは、そこに同時に掲げた引用文に従わせると、たとえば〈見ると思うもの〉に置換された。だから彼女にあって、〈意識する（見ると思う）〉は〈わたし〉（の身体と魂の運動）でなければならぬし、さらに〈意識する（見ると思う）ものについて意識する〉のだから、〈わたし〉はすなわち〈意識〉（魂）であると捉えてかまわなくなる。こうして〈わたし（彼女）〉は〈見ると思うもの〉すなわち〈不幸〉あるいは〈世界の美〉〈について意識する〉ことになる。さすれば彼にいう〈何ものか〉たる〈わたしについての意識〉から生じる〈わたし〉が何ゆえ彼の哲学に「付け足しにされた」ようにみられるかに答えおこなってはならぬであろう。それには再度指摘おくが、〈意識（の存在）〉が〈対自〉や〈即自〉にさせられて、〈わたし（の存在）〉よりか先きに打ち出されていたことに起因する。〈意識（の存在）〉が〈わたし（の存在）〉に従わせるか、〈意識〉に〈わたし〉を付け足すかする例を既出引用文に捨ると、〈対自とは自己を意識として正当化するために、即自としての自己を失なう即自である〉と記されたなかの、〈自己を意識として〉や〈即自としての自己〉をはじめ、〈人間存在は、対自としての自らを失なうことなしに、...〉での、〈対自としての自ら〉、また〈対自が自らを捕らえた〉〈対自は自らに対して固有な存在の欠如である存在である〉、そして〈自らを無化し得るのは存在だけである〉などが、〈わたし〉を第二義的に用いた表現になるといえるのである。ここでいう〈自己〉や〈自ら〉はもとより〈わたし〉と同

義である。たとえば、〈即自としての自己〉〈対自としての自ら〉や〈対自が自らを捕らえた〉という表記にあって、〈意識（対自や即自）〉と〈わたし（自己や自ら）〉の関係は、およそ〈わたし（自己や自ら）が対自（あるいは即自）としての〉存在にあるのではなく、〈わたし（自己や自ら）〉が〈意識（の）存在（対自や即自）〉に付随するよう「付け足しにされた」関係を示唆し、上記引用語句や文章はこのことを証明させる以外にないのである。その最後に掲げた、〈自ら（わたし）を無化し得るのは存在だけである〉という文章中の〈存在〉は〈わたしの存在〉になるとみる必要がある。なぜなら〈自ら（わたし）を無化し得るのは〉、何より〈意識（即自）〉なのであって、この〈即自〉を〈無化〉させる（対象）は〈わたしの存在〉でなければならぬと繰返し得るからである。

しからば〈わたし〉や〈わたしの存在〉はいかなる役割をもたせられるとみることができようか。〈わたし（の存在）〉は思うに、〈即自〉よりむしろ〈対自〉に呼応して用いられる。たとえば、〈投企されたひとつの無（un néant）によって、自ら（わたし）が何であるかを自ら（わたし）に知らしめた〉や〈対自はそうする（脱走する）ことで、自ら（わたし）が現に存在するよりも別のものであり得ることを明確にする〉とした既出引用文があった。これらは〈無化し得る〉〈意識〉が〈即自〉であり、この〈意識（即自）〉〈または〈現存在〉〉を〈投企〉などによって、〈対自（無）〉なる〈別のもの〉にさせんとすべく〈世界に向かう〉ことを含意する。ここで注意すべきは〈世界〉（の語）についてである。〈世界に向かう〉〈世界〉とは一見した通り、外的〈世界〉をさすそれになろうが、ここはその〈世界〉のことにとどまらない。その〈世界〉は〈投企〉などとかかわる〈世界〉でもあるとみられるからして、〈わたしの世界〉と読むことが可能になる。さらにいうと、〈投企〉などを試みさせるは〈わたし〉であって、〈意識〉ではない。つまり〈投企〉などは〈意識〉をではなく、〈わたし〉を（現に）行動させねばならぬのだから、たんに〈意識（即自）〉内で動く行動であり得なくなるわけである。したがって〈投企〉〈参加〉〈選択〉〈行動〉は、例の〈理性（知性）〉の〈思惟する〉〈能動〉能力から産出されるといえども、もはやその〈意識（即自）〉の働き（行動）を可能にする〈意識の世界〉で終始させられるのではなく、〈わたしの世界〉にあって、〈わたしの存在〉として現実に生じる行動であるとみるのでなければならぬ。こうして実際の〈投企〉などを通したうえで、〈意識〉が〈対自〉に〈変身（変化）させられては、この〈対自〉に付随して捉えられるのが〈わたしの存在〉になるとみえるからして、この〈意識（対自）〉なくば、〈わたしの存在〉を語れなくなるも確かであるにせよ、しかし〈わたしの存在〉は〈意識（対自）〉に「付け足しにされた」にすぎないだけかである。サルトルはたとえば、筆者がすでに取り上げた引用文で、〈わたしたちは対自をひとつの無（un rien）と名付けることができた〉と、また〈この無（rien）は徹底的否定として、人間存在そのものであり、その徹底的否定によって世界が（無（rien）として）解明される〉と述べていたし、これらを多少説明すべく、筆者は次なる引用文を掲げおく（以下の引用文はまた上記既出引用文や筆者が論じてきた問題点を証明することになろう）。

Cet être qui 《m'investit》 de toute part et dont rien ne me sépare, c'est précisément rien qui m'en sépare et ce rien, parce qu'il est néant, est infranchissable.<sup>22</sup>

至る所で、《わたしを包囲している》、この存在は、無 (rien) がわたしを分かつところの、この存在は、まさにこの存在からわたしを分かつ無 (rien) であり、この無 (rien) はそれが無 (néant) であるがゆえに、乗り越えられない。(括弧内は筆者)

L'être-dans-le-monde est projet de possession de ce monde et la valeur qui hante le pour-soi est l'indication concrète d'un être individuel constitué par la fonction synthétique de ce pour-soi-ci et de ce monde-ci.<sup>23</sup>

世界－内－存在はこの世界を所有せんとする企て（投企）であり、対自に付きまとう効力は、この対自とこの世界との統合機能によって構成される、ひとつの個別的な存在の具体的な証拠になる。(括弧内は筆者)

前出引用文中の〈この存在〉は、《わたしを包囲している》といわせるからして、筆者にいう外的〈世界〉たる〈存在〉であり、また〈無 (rien)〉とされることをさす。〈この存在〉が〈無 (rien)〉であることは、〈この存在〉ばかりか、さらに〈無 (rien) がわたしを分かつ〉とも記させるからして、〈わたし〉を〈無 (rien)〉にかかわらせて語られることを含意させずにいない。だからサルトルは〈この無 (rien) は徹底的否定として、人間存在そのものであり、その徹底的否定によって世界が（〈無 (rien)〉として）解明される〉と断じ、こうした文意で読むかぎり、〈人間（存在）〉が〈無 (rien)〉であるはむろんのこと、〈無 (rien)〉においてさえ、「人間の世界への関係」を有すると示唆させるわけである（〈解明される〉〈世界〉はここでは〈意識（対自）や〈わたし〉の〈世界〉を意味させはしない。それは〈人間（意識（対自）の）存在〉をも〈徹底的否定（無 (rien)〉）にしたうえで、外的〈世界〉が〈解明される〉からだ）。だが問題にすべきはさらに、彼が〈わたしたちは対自をひとつの無 (un rien) と名付けることができた〉と述べる、すでに触れおいた引用文の方である。これに答えていくにあつて、それでも筆者は、「問題にすべき」として提示した引用文以外の〈対自〉に関しては、およそ〈対自は無 (néant) である〉をもって代表される（また〈対自〉は〈ひとつの〉は別にして〈無 (rien)〉でもある）表現が、ならびにこの〈無 (néant)〉に関しては、たとえば〈世界の無 (néant du monde)〉と語られる（これについては前出引用文で、〈この存在〉という（外的）世界が〈無 (rien)〉とも記される）表現があったことを認め得るし、同じ前出引用文でいう〈わたし〉をば〈無 (néant)〉とみなし得るのは、〈この無 (rien) はそれが無 (néant) であるがゆえに〉と記される〈無 (rien)〉（または〈無 (néant)〉）に〈この存在〉（外的〈世界〉）ばかりか、〈わたし〉を含ませて捉えられるからであることを知っておかねばならない。こうして外的〈世界〉が、〈意識（対自）〉が、〈わたし〉がそれぞれ〈無 (néant)〉や〈無 (rien)〉として表記されることになる。

そこで筆者は一に、〈無 (néant)〉が〈意識（対自）〉や外的〈世界〉のそれぞれにかかわるとみるにあつても、この次第は例の〈無 (rien)〉が〈その徹底的否定によって世界が解明される〉とした場合と同様、「人間の世界への関係」で生じる〈無 (néant)〉（人間の無 (néant) から世界の無 (néant) へ）であるといわなければならない。だから一に、こうした関係を踏まえては、外的〈世界の無 (néant)〉やその〈無 (rien)〉への言及は、

筆者が〈意識（対自）〉と〈わたし〉の各〈無（néant）〉や〈無（rien）〉を論じたあとでも可能になるが、しかしその際、サルトルが〈意識（対自）〉と〈わたし〉を各〈無（néant）〉とみなしたについては、これまで掲げた諸引用文ですでに語ってあるから、その繰返しを省くことにして、ここは一に、彼が何ゆえ〈意識（対自）〉と〈わたし〉を各〈無（rien）〉になると主張し得たかを証明しておく必要がある。これを明かすべく、後出引用文が参照される。

後出引用文は筆者に、その二箇所記された訳語〈この世界〉をどう捉えるかによって、おのずと〈ひとつの個別的な存在〉も何をさすかが見定められるように読ませ得る。要するに〈この世界〉は、訳文の一方に〈世界－内－存在〉（世界のなかの人間）と、他方に〈この対自とこの世界との統合機能〉という語句が見出され、これらを参考にせずにおれないかぎり、外的〈世界〉としてではなく、前出引用文に散見した〈わたし〉、あるいは疾うに記した〈自己（自ら）〉や〈わたしの世界（わたしの存在）〉に置換される各語句（以下では主に〈わたし〉を代表させる）として受け取ることが可能になる。誰かが〈この世界〉は外的〈世界〉を示すと指摘するにあっても、外的〈世界〉は「人間の世界への関係」とされる「世界」に当てはまるにすぎないのだから、「人間の」に継いで質されるとここでもいわなければならなくなる。「人間の」にはまた〈この対自とこの世界〉が相当してこよう。したがってこれを前段で述べたごとく、それぞれ〈意識〉と〈わたし〉とみなすことができるし、さらにいえば、〈この対自（意識）〉と〈この世界（わたし）〉は無関係でいられなくなるのだ。以下に掲げる引用文に聞いて、いかなる関係（になる）かを証明してみることにする。

Le pour-soi est l' être qui se détermine lui (un soi)-même à exister en tant qu' il ne peut pas coïncider avec lui (un soi)-même<sup>24)</sup>（括弧内は筆者）

対自は、対自が自己自身と一致し得ないかぎりにおいて実存（存在）するごとく、自己自身を規定する（意識）存在である。（括弧内は筆者）

La conscience est un être pour lequel il est dans son être conscience du néant de son être.<sup>25)</sup>

意識とは、ひとつの存在のなかに、その存在の無（néant）の意識がある（ところの）、ひとつの存在である。（括弧内は筆者）

〈対自（意識）〉を中心にした、以上の二引用文からしても、サルトルに〈対自はそれ自らの意識存在の、あるいは実存（存在）の根拠である〉といわせたは確かなことになる。だが同時に〈対自が自己自身と一致し得ないかぎりにおいて〉と記させた〈自己（わたし）自身〉の方はいかにみられるかである。上記二番目の引用文に、彼は〈ひとつの存在〉と書く。これも確かに、〈意識（対自）存在〉であることを示唆させようが、筆者は〈ひとつの存在（意識（対自）存在）〉がときに彼にいわす〈人間存在〉の一にすぎないという読みで、その〈人間存在〉に与する他方に、かかる〈自己（わたし）〉が関係するように

語られくるとみる。しかも〈対自が自己（わたし）自身と一致し得ない〉様子でだ。このことは次に提示する引用文をもって答えられるにちがいない。

L' être humain n' est pas seulement l' être par qui des négativités se dévoilent dans le monde, il est aussi celui qui peut prendre des attitudes négatives vis-à-vis de soi.<sup>26</sup>

人間存在は、純粹否定性が世界のなかにあらわれる存在であるだけでなく、自己（わたし）に対して否定的様子を取り得る存在でもある。（括弧内は筆者）

サルトルがこの引用文中の後半（文章）を〈自己（わたし）に対して〉と明記するからして、〈人間存在〉は一に〈自己（わたし）〉の〈存在〉をさすことになるし、前半（文章）にあっては〈人間存在は、純粹否定性が世界のなかにあらわれる存在である〉からして、〈意識（対自）存在〉が示唆されるのでなければならない。要するに〈人間存在〉は〈意識（対自）存在〉と〈わたしの存在〉で組立てられるということである。そのうえ「以上」とした、最初の引用文からは、各〈存在〉が〈対自は、...自己（わたし）自身を規定する（意識）存在である〉と書かれるような関係にあることに留意すべきである。このことはまた既出引用文での語句や文章を再度拾い出しても分かる。たとえば、〈対自としての自ら（わたし）〉、〈対自とは自己（わたし）を意識として正当化する<sup>27</sup>〉や〈対自が自ら（わたし）を捕らえた〉などである。これらにみられるは繰返しおくが、彼が〈人間存在〉にとって、〈対自はそれ自らの意識存在の、あるいは実存（存在）の根拠である〉と主張する通り、〈意識存在〉のうちの〈対自存在〉が基盤であり、そこに立つことでもって、〈わたしの存在〉よりか優先されねばならぬ存在であることを証したにある。だから筆者は〈わたしの存在〉は〈意識（対自）存在〉に「付け足しにされた」と指摘するしかなかった。つまり、〈対自はまさにそう（脱走）することで、自ら（わたし）が現に存在するよりも別のものであり得る〉だけでなく、〈別のもの〉がさらに〈対自は自ら（わたし）に対して固有な存在の欠如である存在である〉ことにさせる一方で、

En effet, s' il est nécessaire que je sois sous forme d' être-là, il est tout à fait contingent que je sois, car je ne suis pas le fondement de mon être.<sup>28</sup>

事実、わたしがそこに－存在する様相のもとに存在することは必然的であろうとも、わたしが存在することは完全に偶然的なのである。なぜならわたしはわたしの存在の根拠ではない（と彼にいわせるのだから）。（括弧内は筆者）

したがって〈わたし〉は〈対自〉にいう〈別のもの〉とは異なる、〈対自〉に組み込まれるごとくに付随する〈別のもの〉たる〈存在〉だと、あるいは再度に亘り、〈わたし〉は〈対自としての自己（わたし）〉の例に代表させられるように、〈対自〉に「付け足しにされた」、「第二義的」〈存在〉になることが否めないといわざるを得なくなる。この〈対自としての自己（わたし）〉またほかで記される〈即自としての自己（わたし）〉という各語は〈自己（わたし）の存在〉に立脚して書かれたのではおよそなく、あくまで〈意識（対

自) 存在) を〈根拠) に語られた表現でしかない。要は〈わたしの存在の根拠) は〈意識) にみられるのである。それに〈意識) は〈意識) に対して〈あらわれる (paraître)〉<sup>29</sup>現象に触れ、これをおそらくは〈即自 (存在)〉において、〈何ものか) なる対象として〈志向) するだけであって、かかる〈即自) でさえ、〈自己 (わたし) 自身) ならびに〈対自としての自己 (わたし)〉を〈志向) できるのでない。〈対自としての自己 (わたし)〉を可能 (現実) にするは〈行動 (投企)〉によっていた。なぜなら、対象に向けられる〈志向) のままでは〈自己 (わたし)〉にかかわることがない、そうでなくて、その〈志向) に則る〈行動 (投企)〉においてはじめて、〈自己 (わたし)〉ばかりか、〈意識 (対自)〉や外的〈世界) にさえ関係させることができたといえるからである。〈行動 (投企)〉にあって、〈対自がそれ (即自) であるところの即自を無化) し、〈即自としての自己 (わたし) を失なう) ことによる、〈対自は無である) 〈無 (néant)〉や〈対自をひとつの無と名付ける) 〈無 (un rien)〉が生じる一方、〈自ら (わたし) を無化し得るのは存在 (即自) だけであり、〈無は無が世界の無として明白に自ら (わたし) を無化するときにはか無であることができない) という、〈世界の無 (néant du monde)〉と〈自ら (わたし)〉の〈無 (néant)〉や〈無がわたしを分かつ) とした〈無 (rien)〉または〈この無は徹底的否定として、人間存在そのものであり、その徹底的否定によって世界が (無として) 解明される) という〈無 (rien)〉がもたらされるとする。だからことが筆者のみる〈ひとつの存在 (意識 (対自) 存在)〉と〈わたしの存在) に関する場合、〈対自とは自己 (わたし) を意識として正当化するために〉、サルトルが〈人間存在) にとって、〈自己 (わたし)〉をも〈意識) に与させないわけにはゆかなくなった関係に、これすなわち〈この対自とこの世界 (わたし) との統合機能) である関係になることを強調していたと読み取れるのだ。それには〈投企) が欠かせないと繰返しおく。〈おのおの人間存在は自己 (わたし) 自身の対自を即自-対自に変身させる、直接的企て (投企)〉を、〈わたしは、...他者を対象 (客観) 化すべき投企であり、あるいは他者に同化すべき投企である) ことを、〈根本的な投企なるものは、...わたしの世界-内-存在全体にかわる-投企である) ことを可能 (現実) にしなければならない) という、要するに〈投企) は〈意識) や〈わたし) たる〈人間存在) を〈対自) に、〈無) に、しかも〈自由) にした、すなわち〈対自は自由であり〉、〈無の現出を条件づけるかぎりでの人間 (の) 存在) は、〈わたしたちに自由としてあらわれた) と、〈自由は人間 (の) 存在の無である) という、これも既出引用文にみられた通りなのである。

さてここからは、前段までに述べたことに対する、たとえば筆者に、サルトルが「何ゆえ〈意識 (対自)〉と〈わたし) を各〈無 (rien)〉になると主張し得たかを証明しておく必要がある」といわせたことをはじめとする、筆者にとっていまだ未解明ないくつかを取り出され言及されるところになる。その際はしかし、筆者が彼にいう〈存在論) をば筆者にいう「認識論 (観念論)」（要は「存在論すなわち認識論) として明かすうえでかわってこよう、そのいくつかを提示するにかぎられると、同時にそのいくつかはヴェユに窺える「認識論 (哲学)」に彼の哲学を比較させるために筆者に語られたにあるからして、彼の哲学の全体像を見通したところからの論証ではないと予め断っておく。かつそのいくつかに筆者なりの答えが導き出されるが、それでも人に、この答えは証明に基づくのでなしに、たんに推論したものにすぎないといわれるにせよ、筆者にあっては推論にさえ立たずに、かかる答えも出せなくなるし、そこに依拠させた、さらなる展開の試みすら不可

能になろうと付け加えおく。とまれそのいくつかの一とは〈徹底的否定 (négation radicale)〉のことである。これは〈無 (rien)〉をさすそうである。しかるに形容詞も付かずに用いられる〈否定 (négation)〉は他の引用文にみえる〈欠如 (manque)〉や〈拒否 (refus)〉と同意であって、〈無 (néant)〉に当てられるそうである。なぜなら彼に〈無 (néant) は存在 (対自) としての否定である〉と語られるからである。

上記の〈無 (néant)〉についてはこれまで少しは触れてきた。そこでここは〈無 (rien)〉の方を、また〈無 (rien)〉が〈無 (néant)〉に結びつくときみなされるか否かを明らかにさせておかねばなるまい。サルトルが〈対自をひとつの無 (un rien) と名付けることができた〉と述べる時、筆者には〈ひとつの無〉という表記から、〈無 (rien)〉は〈ひとつ〉だけにかぎらせないで語られねばならぬことが予想される。彼が〈ひとつの無〉を〈対自〉にいう〈無 (rien)〉に相当させたのだから、他に〈ひとつ〉以上の、「もうひとつ」たる〈無 (rien)〉もあってしかるべきであるし、「もうひとつ」に当てはめ得るはずで指摘しておいた通り、〈人間存在〉を成り立たせる、この〈対自〉のほかには〈わたし〉という〈存在〉しかなかったからして、〈わたし〉が「もうひとつ」の〈無 (rien)〉の対象になっていなくてはならないわけである。しかも筆者に、「〈無 (rien)〉が〈無 (néant)〉に結びつく」といわせるは、〈この無 (rien) はそれが無 (néant) であるがゆえに〉と書かれたのを踏まえると、〈無〉というものは〈néant〉から〈rien〉になる、あるいは〈néant〉を深めたものが〈rien〉であるところにある。なぜそういえるのか。それは〈無 (rien)〉が他で〈徹底的否定〉と記されるからである。換言すると〈徹底的否定〉は筆者のみるところ、「たんなる」〈否定〉(これは〈néant〉になる)を〈徹底的〉にする、すなわち「完全」(後記括弧内という〈純粹〉)にする〈否定 (rien)〉として彼に捉えられていたと読み得るからである。(彼の述べる〈純粹否定性〉は筆者にすれば、〈純粹〉でなければならぬかぎりは、〈徹底的否定〉が示唆するのと同様に、〈無 (rien)〉をさしてなくてはならないだけか、この〈純粹否定性〉としての〈無 (rien)〉もまた〈意識 (対自)〉と〈わたし〉に関係せずにおれなくなろうといい得る。なぜなら〈純粹否定性〉は複数形 (négativités) で表記されているからである。)

上記括弧内のことも含め、〈無〉というものが以上により、〈rien〉から〈néant〉へではなく、〈néant〉から〈rien〉への順にもたらされることは、各〈無〉がかかる次第にて、〈意識 (対自)〉と〈わたし〉のそれぞれにみられくることを意味させるが、だからといって各〈無〉も「付け足しにされた」〈わたし〉から〈意識 (対自)〉へのでなしに、〈意識 (対自)〉から〈わたし〉への順に実現されることを知っておかねばならない。つまり、〈無 (néant)〉に関することであれば、〈意識 (対自)〉と〈わたし〉の各〈無 (néant)〉が見出されることは同時に、〈néant〉が〈意識 (対自)〉から〈わたし〉への〈無 (néant)〉になることに、また〈無 (rien)〉に関することであれば、〈意識 (対自)〉と〈わたし〉の各〈無 (rien)〉が見出されることは同時に、〈rien〉が〈意識 (対自)〉から〈わたし〉への〈無 (rien)〉になることにちがいなからうし、〈意識 (対自)〉が〈無 (néant)〉から〈無 (rien)〉になるならば、〈わたし〉においてさえ〈無 (néant)〉にとどまらせず、〈わたし〉を〈無 (rien)〉にさせるであろう。これによって、〈世界-内-存在 (人間存在)〉は既出引用文にいう、〈この対自とこの世界 (わたし) との統合機能〉を成り立たせることに、かつ〈ひとつの個別的な存在〉になることに向かわせ得たのだ。このように、〈統

合機能)が〈意識(対自)〉の〈無(rien)〉をもって〈わたし〉へと連動させるごとくに成るといえるは、サルトルがこの〈意識(対自)〉と〈わたし〉を含ませ捉えていう〈人間存在〉での〈無(rien)〉を〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉以外の語(句)を用いて表記してはいないからである。だから上記した〈ひとつの個別的な存在(un être individuel)〉とは一人一人の〈人間存在〉がかかる〈意識(対自)〉と〈わたし〉とを合わせ有して〈構成される〉とみておかねばならないわけである。だが彼がここでもその〈un être〉の〈un(ひとつの)〉と強調したというのであれば、筆者は別の(もう)〈ひとつの個別的な存在〉を立てることを予想しなくてはならなくなる。こうした〈存在〉はたとえば、彼が〈おのおの人間存在は、...即自存在の全体としての世界を自ら(わたし)のものにする企てである〉と述べる通り、〈世界〉(筆者にいう外的〈世界〉)になろうが、しかし〈世界〉が単独で「もう」〈ひとつの個別的な存在〉を形成せんとする謂ではなく、「もう」〈ひとつの〉〈存在〉も〈ひとつの〉〈存在〉と同じく、〈個別的な存在〉なる〈人間存在〉に与されるのがこの〈世界〉でもある。要は〈意識(対自)〉と〈わたし〉で〈構成される〉〈人間存在〉は〈世界〉とのかかわりさえ有せずにおれない〈個別的な存在〉でなければならないのだ。したがって、一人一人が〈世界〉のことまでも加えた〈統合機能〉をして〈人間存在〉をばその〈個別的な存在〉たらしめねばならぬことになる。

そこで〈世界〉についてまとめるべく、筆者は再度、サルトルに〈無(néant)(なるもの)〉はその無化(néantisation)において、世界の拒否(refus)として自己(わたし)に成るためにとくにこの世界へ向かうときにしか、無(néant)であることができない〉といわせた、既出引用文を引き合いに出してみる。ここにいう〈無化〉と〈無〉は〈意識〉に関連し、〈意識〉を〈対自〉にする一方、〈世界の拒否(世界の無)〉として自己(わたし)に成るために〉とは、〈自己(わたし)〉の〈無(néant)〉に起因して〈世界の拒否(無)〉を伴わせる、つまり〈わたし〉の〈無〉が〈世界の拒否(無)〉を生じさせるのであって、〈世界の拒否(無)〉をして〈わたし〉を〈無〉たらしめる次第にあるのではない。このことは彼が〈意識(対自)〉の〈無(néant)〉と〈わたし〉の〈無(néant)〉との関係において、前者を後者より先き立たせ問うた場合と同様になる。かつ〈無(néant)〉は彼にさらに〈意識(対自)〉と〈わたし〉の各〈無(rien)〉に展開されるといわせたが、筆者はかかる〈無(rien)〉の証左を例の〈徹底的否定〉や〈純粹否定性〉と書き込ませた、各既出引用文で知ることができたし、またその引用文のそれぞれに、彼が〈世界〉のことに関し、〈世界が(無(rien)として)解明される〉と、〈人間存在は、純粹否定性が世界のなかにあらわれる存在である〉と付記する以上、〈人間存在〉たる〈意識(対自)〉と〈わたし〉の〈無(rien)〉によって、〈世界〉もまた〈世界の無(néant)〉ではなく、〈無(rien)〉でしかなくなると語ったことに留意せずにおれない。何より留意すべきは、後者の引用文章で記される〈世界〉が筆者の前記したことのほかに、ここは筆者にいう外的〈世界〉も含ませ語られていると指摘しておくことにある。筆者は前記でこの〈世界〉の一を〈意識(対自)存在〉に見立ておいたが、だがそう捉えるだけでなしに、外的〈世界〉と受け取ることにより、〈意識(対自)存在〉での〈純粹否定性〉が当の〈意識(対自)存在〉にと同時に、その今いる場〈世界のなかにあらわれる〉とみることができるのである。こうして〈人間存在〉は外的〈世界〉にさえ関係しなければならなくなる。要は〈人間存在〉の一たる〈意識(対自)存在〉にあって、これが〈無(néant)〉や〈無(rien)〉として

外的〈世界〉にも〈あらわれる〉ことで、その〈世界〉は〈世界の無 (néant)〉や〈世界の無 (rien)〉になり得るということである。それと同じようにみえるのが後者の引用文章に後続する文章である。すなわち〈人間存在は、(純粹否定性が) …自己 (わたし) に対して否定的様子を取り得る存在でもある〉と語られるなかの〈わたし (の存在)〉が〈世界〉と関係せざるを得なくなる。要は〈純粹否定性〉が〈人間存在〉の他の一たる〈自己 (わたし) に対して否定的様子を取るという〈無 (rien)〉になるばかりか、〈世界〉を〈無 (rien)〉にさせることにかかわらせるということになる。

しかしなぜ〈純粹否定性〉にあって、前段に記したごとくにいい得るのか。換言すると〈意識 (対自) 存在〉と〈わたし (の存在)〉で構成される〈人間存在〉に、サルトルにいう〈世界〉(筆者にいう外的〈世界〉)がかかわらずにいないとされる時、彼の〈世界〉という表現は〈世界〉が〈意識 (対自)〉や〈わたし〉をさす各〈世界〉以外に、果たして外的〈世界〉をこうした〈人間存在〉なる〈世界〉に組み込ませるものとして使われたのか、そうみられるのであれば、外的〈世界〉は〈意識 (対自)〉と〈わたし〉の両方に、あるいはこのどちらかに関係して捉えられるかを検証しておく必要がある。筆者はここでまず、外的〈世界〉を含意させよう〈世界〉となって表記もされる既出引用文を取り出してみる。たとえば、〈対自は自由であり、対自はひとつの世界 (un monde) が存在するようにすることができる〉や〈世界-内-存在はこの世界 (ce monde) を所有せんとする企て (投企) である〉などの文章がそれである。次に、上記二番目の文章の〈この世界〉は一見した通り、〈わたし〉(〈わたしの存在〉や〈わたしの世界〉)であったし、最初の文章での〈世界〉も例の〈ひとつの〉と訳し得るのだから、またその文章中に〈人間存在〉の一方でいう〈意識 (対自)〉の語もみられるのだから、「他の (もう) 」「ひとつの〉〈世界〉には〈わたし〉しか当てはまらなくなるわけである。〈わたし〉と受け取られるは後述もするが、この文章中に記される語〈企て (投企)〉を実現させ得るのが〈わたし〉であって、〈意識 (対自)〉ではないといわなくてはならないからである。そして、〈ひとつの世界〉や〈この世界〉という各表記は〈わたし〉と同時に、筆者にいう外的〈世界〉をさすと理解されなければならなくなる。これを明かすは彼が〈わたしのために、(外的)世界があらわれるようになる〉や〈自分 (わたし) というもの (自我) がなければ、(外的)世界もない〉と断じていたことにある。外的〈世界〉に即応できるのは〈意識 (対自)〉ではなく、〈わたし〉の方なのだ。要は外的〈世界〉とのかかわりにあっては、〈人間存在〉を構成する、一方の〈意識 (対自)〉でなしに、他方の〈わたし〉こそが関係すると、外的〈世界〉は〈わたし (の存在)〉なしに〈存在〉しないということである。

しからば、〈わたし〉が〈存在する〉からして、外的〈世界〉も〈存在する〉といえたにせよ、外的〈世界〉が〈意識 (対自)〉でなく、〈わたし〉にかかわらねばならぬと筆者に記させたはなぜか。〈意識 (対自)〉は〈無 (néant)〉や〈無 (rien)〉にかかわった。この〈意識 (対自)〉なくば〈わたし (の存在)〉を語り得なくなるのが〈意識 (対自)〉と〈わたし〉の関係であった。だから〈わたし〉も〈意識 (対自)〉の影響を受けて〈無 (néant)〉や〈無 (rien)〉にみなされるは当然であった(〈人間存在〉はまずこのような〈意識 (対自)〉と〈わたし〉で一として〈統合〉できたのだから)。しかしながら、〈意識〉が〈対自〉に〈即自〉にさせようが、その〈意識〉は、要はサルトルに〈意識〉を代表しいわせる能力〈理性 (知性)〉は当の〈意識〉内で〈思惟する〉作用 (行動) でしかなく、換言すると上記

した〈対自〉や〈即自〉を例にしていうと、各語を〈作為する〉ほかに、〈意識（理性）〉での作用（行動）以外を意味させはしなかったと繰返し得る（この〈意識〉の〈行動〉はヴェーユにたとえて筆者に語らせると、あの〈思惟と行動との関係〉にあって、〈行動〉（「動の行動」）に基づくことのない、〈思惟〉の〈行動〉たる「静の行動」にすぎないようにみえる）。したがって〈意識〉が〈意識〉自身内で〈対自〉であろうとすることは、そこに同時に伴わせ得る〈行動〉が〈意識〉（の作用（行動））以外になければならないことを示唆させずにおれなくした。かかる〈行動〉こそ〈参加〉というそれであるばかりか、わけても〈投企〉なる〈行動〉であり、この〈投企〉を実現させるは再度指摘するが、〈意識（対自）〉であり得ずに、〈わたし〉なのであったことにある。〈わたし〉が動いて（〈行動〉すなわち〈投企〉して）はじめて、〈意識〉を〈対自〉にさせることができた。だから筆者は〈わたし〉の現実的〈行動（投企）〉なしに、〈意識（対自）〉としての〈無（néant やrien）〉に到し得なくなると読むことができるわけである。

そしてその〈わたし〉にとって、〈行動（投企）〉のためには、〈事物や他者〉なる外的〈世界〉が対象となる必要もあった。なぜなら、サルトルが既出引用文で〈第一義の相対的な関係は人間存在から（外的）世界に向かう関係になる。こうして（外的）世界がわたしに指し示す、この第一義の関係はわたしの存在である〉と記したなかで、〈人間存在〉と書きつつも、この語以降の文章をみて分かるように、〈人間存在〉を〈意識〉にでなしに、〈わたし〉に代表させるのだから、当の〈わたし〉が外的〈世界に向かう〉ことになるのを証しするし、他の既出引用文で〈わたしがそれ（投企）である、根本的な投企なるものは、（外的）世界のこれこれの個別の対象に対する、わたしの諸関係にかかわる一投企ではなく、わたしの世界-内-存在全体（〈意識〉における〈対自〉や〈即自〉）にかかわる一投企であるといひ得）ども、〈わたし〉が少なくとも外的〈世界に向かう〉わねば、〈わたしの世界-内-存在全体〉にさえかかわらなくなるのであり、外的〈世界に向かう〉ことが〈わたし〉による〈投企〉でなければならぬのを明らかにするからである。〈投企〉は〈わたし〉を、今いる場から他の場へ、あるいは〈わたしの世界-内-存在全体〉へと動かすことである。

以上のように、〈ひとつの世界〉や〈この世界〉と表記したサルトルに対し、筆者はそれぞれを〈わたし〉と、また外的〈世界〉とも受け取ってきたと同時に、他の既出引用文を持ち出して、そこにこれらと同様な理解を得ることができる。それは〈意識は意識でない存在に注がれて生まれる〉とした文章である。筆者はすでに〈意識でない存在〉を外的〈世界〉に当てはめると一見しておいたが、ここではそれに加えて〈意識でない存在〉を〈わたし〉と見て取ることも可能になるといわずにおれなくなるのだ。外的〈世界〉（事物や他者）は〈意識でない存在〉とされるがゆえに、彼には端から〈即自存在〉にみられていた。しかもその〈事物〉はむろんのこと、〈他者〉すら、〈人間存在〉と異なって〈対自存在〉になり得ないということにある。一方この〈意識でない存在〉を〈わたし〉と捉えたは、〈わたし〉が当然外的〈世界〉と同じく、〈即自存在〉に該当させるしかない（これについては後述もする）と、また〈わたし〉が文章中の〈意識〉とともに〈人間存在〉を〈構成〉する一と見立てられることは、たとえば〈対自と即自との関係〉を取り上げ質す際に、〈対自〉には〈意識〉が、〈即自〉には〈わたし〉がかかわることを含意させるし、このことなくば、かかる〈関係〉は成り立たぬだけか、それ（関係）をして〈統合機能〉さえ發揮せしめなくなるといえるからである。ただそのとき、〈意識は即自存在（わたしや外的

世界）に注がれて生まれる」といい換えられるにしても、留意すべきは、〈わたし〉や外的〈世界〉が〈意識〉する〈認識〉するとみなされるのではないと、要は〈意識〉し〈認識〉できるは〈意識〉以外にないのであり、〈意識（理性）〉によってもたらされる〈対自〉と〈即自〉にあって可能なのだということである。

だが〈ひとつの世界〉〈この世界〉や〈意識でない存在〉という、一語（句）が複数の意味（訳語）を兼ねるは、かの〈l'être（存在）〉の語が記される度に、筆者に〈対自〉か〈即自〉かを即断させ得なかった以上に問題だと指摘しておくことができる。いずれかにして説くのが哲学者たる、あるべき姿勢のように思えるが、問題はそれだけではなく、さらに次のところでも生じくる。その一は、前段で触れた、〈わたし〉と外的〈世界〉が〈即自（存在）〉とみられるために、もとより〈対自（存在）〉になり得ないことは、かかる〈即自（存在）〉をば〈無（néantやrien）〉にさせないことを示唆するにもかかわらず、サルトルは何ゆえ〈わたし〉の〈無〉と外的〈世界の無〉と記したか、要は〈無〉が〈対自〉にばかりか、〈わたし〉と外的〈世界（事物や他者）〉に〈存在される〉と語られ得るは、そもそも〈わたし〉と外的〈世界〉をいかにみていたからかにある。これらに答えるにあって、筆者は〈わたし〉を例に、その〈わたし〉が彼の既出引用文にどう表記されていたかを今一度確認しておく必要がある。彼が〈対自は、本来、自らの即自－存在と一致できない存在である〉と、あるいは〈対自は、対自が自己自身と一致し得ないかぎりにおいて実存（存在）するごとく、自己自身を規定する（意識）存在である〉と述べたなかで、〈自ら（の）〉や〈自己（自身）〉の表現が〈わたし〉をさすのであり、そのうえ〈即自－存在〉とされる〈わたし〉は〈対自〉と〈一致できない〉存在であると筆者に確かめられる一方で、例の〈対自と即自との関係〉として〈対自〉と〈即自〉を〈統合（関係）〉させるためなのか、彼は〈意識とは、ひとつの存在のなかに、その存在の無（néant）の意識がある（ところの）、ひとつの存在である〉という、〈対自〉の〈無（néant）〉を持ち出して、これを〈即自〉に付け足す〈わたし〉（ならびに外的〈世界〉）に当てはめたわけである。

筆者が今〈対自〉と記したはずで触れた通り、〈対自〉が〈意識〉としての〈ひとつの存在〉という〈ひとつの〉に相当するほか、ここでも〈意識〉に「他の（もう）」〈ひとつの存在〉がなければならぬならば、これに適當するは〈即自（存在）〉でしかないであろう。さらにその〈対自〉と〈即自〉が〈関係〉せずにおれないとみえるは、〈無化された即自と、投企された即自との間において、対自は無である〉関係を保つからであろう。彼はこの既出引用文に続いて、〈即自〉に対し〈わたし〉の語に代えさせては、〈人間存在は（意識（対自）であるほかに）即自存在であることに対する欲望である〉とも語るのだから、その〈欲望〉は、つまり〈理性（思惟）〉の使われ方と同様に、実際の〈行動（投企）〉を伴わせない、〈意識〉の〈行動〉（筆者にいう「静の行動」）にすぎない〈欲望〉は上記した語句を例に再度いうと、〈意識（対自）〉が〈無化された即自と、投企された即自〉としての〈自己（わたし）自身〉になるよう〈規定〉したり促したりすることにある。実際の〈行動（投企）〉は繰返すが、〈意識〉でいわせるだけの〈即自〉では不可能であり、この〈即自〉に「付け足しにされた」〈わたし〉によらねばならない。要するに〈意識（理性）〉は〈意識〉内でのそれ自身の〈行動（運動）〉にとどまらせるからして、〈意識（理性）〉が次善の策に、例の〈投企〉を〈思惟〉しても、〈投企〉は現実の〈行動〉を含意させはしないと、〈意識〉に生じる、〈投企〉なる〈観念〉とこの〈観念〉に従って実際に身体ま

でを動かさざるを得なくなる〈行動（運動）〉とはおのずから相違すると、その身体を動かすは〈意識（対自や即自たる各観念）〉ではなく、〈わたし〉であると、〈投企された即自〉や〈無化された即自〉を現実にさせるのが〈わたし〉であると、だから「〈わたし〉による」として〈わたし〉を持ち出すは実際の〈行動（投企）〉のためであり、こうした〈わたし〉なくば、〈この対自（意識）とこの世界（わたし）との統合（関係）〉が窺えないどころか、〈わたしは、...他者を対象（客観）化すべき投企であり、あるいは他者に同化すべき投企である〉という〈他者〉すなわち外的〈世界〉に〈向かう〉こと、そこで〈投企〉し〈無化〉になることすらできなくなるということである。確かに〈対自としての自ら〉や〈即自としての自己〉たる語句表現の〈自ら〉や〈自己〉は〈わたし〉に置換されよう。しかれどもその〈わたし〉は、〈わたし〉が〈意識〉であり、この〈対自〉や〈即自〉そのものに与するとしたところにあるのではない。だから筆者は彼からそう読むことができない。とすれば〈わたし〉は彼のいかなる意図で哲学に登場してきたのであろうか。繰り返しいわねばならぬが、〈わたし〉が持ち出されたは実際の〈行動（投企）〉を可能にすることに、同時に外的〈世界〉を語ることにあったし、これ以外での用いられ方は矛盾を生じさせかねないからである。

〔続〕

註

- (1) 前号とは「ヴェーユ身体論〔補VI〕～現代科学やサルトルとの比較①～」（新潟大学大学院現代社会文化研究科、「フランス文化研究」、第3号、2010年）と、サルトルに関して問うた「ヴェーユと実存主義者たち②」（新潟大学大学院現代社会文化研究科、「欧米の言語・社会・文化」、第16号、2010年）の諸拙論をさす。なおサルトルについては上記拙論の順にて論じているし、今回と次回で完とする。また序いでながら、「ヴェーユと実存主義者たち①」（新潟大学人文学部人文科学研究、第123輯、2008年）ではサルトルの伴侶ボーヴォワールを取り上げ、ヴェーユと比較させている。
- (2) LA BIBLE 〈Au commencement était la Parole...〉 (ÉVANGILE SELON JEAN I) P.895 (LES SOCIÉTÉS BIBLIQUES)
- (3) Jean-Paul SARTRE 《L' être et le néant》 (Gallimard) P.494 〈L' homme est libre.〉
- (4) Ibid., P.481
- (5) Ibid., P.214
- (6) Ibid., P.410
- (7) Ibid., P.659 〈la fonction synthétique (de ce pour-soi-ci et) de ce monde-ci〉
- (8) Ibid., P.189 〈le pour-soi n' est jamais.〉
- (9) Ibid., P.186
- (10) Ibid., P.214
- (11) Ibid., P.218
- (12) Ibid., P.63 〈Il (le néant) est la négation comme être.〉 (本文括弧内は筆者)
- (13) Ibid., P.46 〈Le néant hante l' être〉 (本文括弧内は筆者)

- (14) Ibid., P.59 〈L' homme est l' être par qui le néant vient au monde.〉
- (15) Ibid., P.577
- (16) Ibid., P.259
- (17) Ibid., P.53
- (18) Ibid., P.213 〈L' en-soi ne pouvait jamais de lui-même être présence.〉
- (19) Ibid., P.213 〈Cette présence du pour-soi à l' être〉
- (20) Ibid., P.213 〈Le pour-soi est fondement de son propre néant...〉
- (21) Ibid., P.489 〈Ils (les malheurs) sont voilà tout, ils (les malheurs) constituent la condition de l' ouvrier〉
- (22) Ibid., P.259
- (23) Ibid., P.659
- (24) Ibid., P.116
- (25) Ibid., P.82
- (26) Ibid., P.82
- (27) 筆者が「ヴェーユ身体論〔補VI〕」（上記「フランス文化研究」第3号、2010年）の引用文（註53P.25）中の二箇所の〈自己〉に付した括弧（内の事項）はここに記したように、〈わたし〉も適当する。なぜなら〈人間存在〉は〈対自〉をして〈自己〈わたし〉〉をも〈意識として正当化〉せしめることが可能であるといえるからである。本文後述参照。
- (28) Jean-Paul SARTRE 《L' être et le néant》（Gallimard） P.356
- (29) Ibid., P.37